明治三十三年九月廿二日發行（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百柒拾號

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百三十號　目次

十月例會廣告

本會集會の義炎暑中休會致居候處追々秋冷相催し候に付來十月六日(第一土曜日)神田御茶の水橋外女子高等師範學校内に於て午后正一時より晴雨に拘はらず本會の例會相開き候當日は左記大家の講演有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會を冀望致候也

追而本會　總裁殿下へは會長より御臨場の義を願ひ出で候也

一演題未定　　醫學博士　中濱東一郎君

一皮膚と毛髮の病に就て　　醫學博士　土肥慶藏君

會計幹事移轉

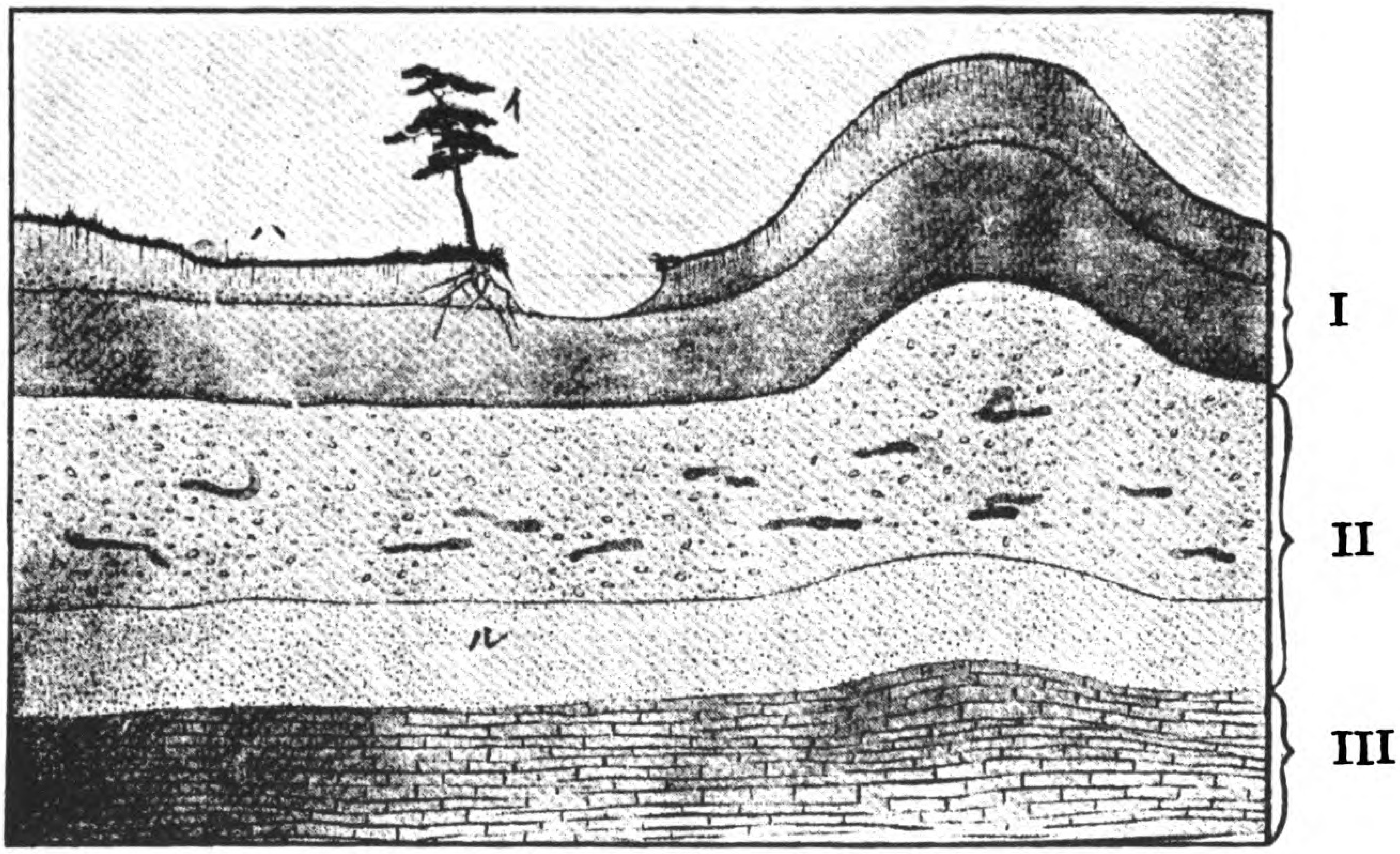
本會々計主任幹事高木かう子には今回麴町區內幸町壹丁目三番地(舊星亨氏邸)へ移轉相成候也

三十三年九月

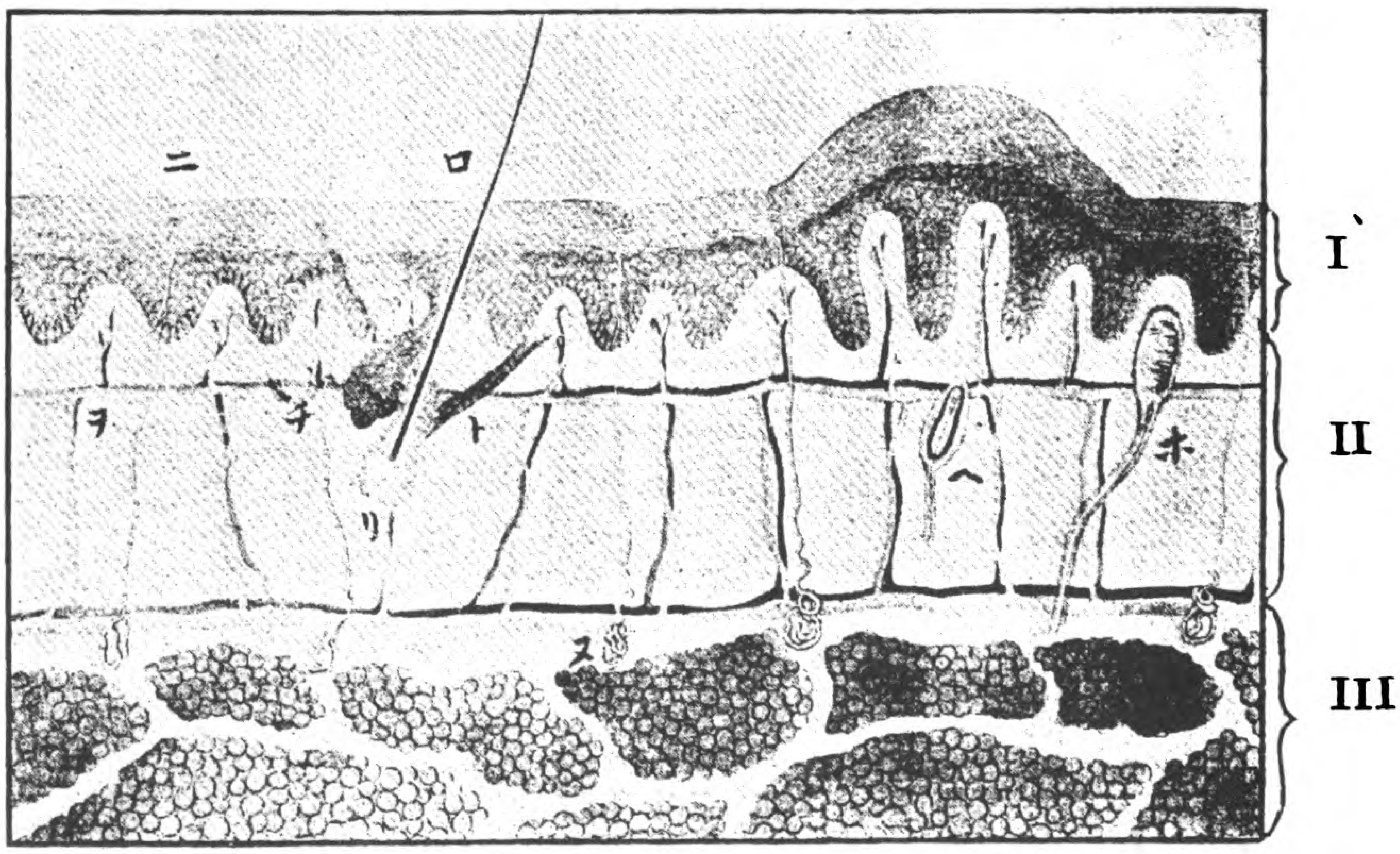
私立大日本婦人衞生會

地層と皮膚の比較

(イ)樹木　(ロ)毛　(ハ)噴水　(ニ)汗腺ノ口
(ホ)神經　(ヘ)仝上　(ト)立毛筋



(チ)皮脂腺　(リ)毛根　(ヌ)汗腺ノ始リ
(ル)噴水ノ始リ　(ヲ)血管



I 表皮層　II 眞皮層　III 皮下層

婦人衛生雜誌第百三十號

（明治三十三年九月二十日發行）

講演

米國に於ける人種問題に就て

米國ハーバード大學卒業　ミス、ベーコン

明治學院　井深梶之助君通譯

私の今日御話を申上げまする問題は、米國に於ける人種の問題でございますが、此方へ參りまして何う云ふ問題に就て話して呉れるかと云ふ御尋がありました時に、此事を申上げて置きましたが、一寸之を日本語に飜譯することが困難であつたと云ふことを見て奇妙に思ひました、日本に於きましては皆一ツ人種でございますけれども――南よりして北に至りますまで皆同人種から成立つて居るのでありますが、我米國に於きましては左樣でございませぬ、色々の人種が一ツ國に住まつて居りまして、其元も違ひまするし又其文明の程度も違つて居りますから、從つて人種上の問題と云ふことが起るのでございます、御國に於きましては人種上の問題と云ふことは先づ無いことでございませうが、私の國では始終あるのでございます、併しながら今日は夫等の總ての問題に就て御話を申上げると云ふのではございません、只其中の二ッの問題でございます、私が直接に關係を有つて居りました所の二ッの人種上の問題に就て、今日は聊かそれを申上げやうと云ふ考でございます、

皆樣も御承知の通り西曆一千四百九十二年に、コロンブスが歐羅巴からして太西洋を横ぎつて航海を致しました時には、日本と云ふ國に行く積りで出掛けたのであります、さうして遂に亞米利加の一ッの島

に到着致しました時に、是が即ち豫て聞いて居る所の日本國であると想像を致したのである、其時分は勿論日本のことは歐羅巴には克く解つて居りませんので、只印度の一部分であると云ふやうに聞及んで居りました、コロンブスの考では、もう是が――此島が日本の島で、もう少し西の方に向ふて行きますならば亞細亞の大陸があるであらうと斯う考へました、其方向に向つて段々參りますれば日本にも到着いたしました譯でございますが、コロンブスが日本に達する前にはもう一ッの大いなる所の大陸があり、又もう一つ大いなる海があると云ふことは知らなかつたのであります、さうして只其自分が發見した所の島は、豫て旅人の話に聞いて居ります所の日本國であると考へました、故に其島に住んで居る所の人民を印度人と名付けた、此印度人と名付けたのは日本は印度の一部分であると云ふやうに思ふて斯う名付けた譯でありました、偖コロンブスが參りまして其島の土人の有樣を見ました所が、何うも豫て旅人の話に聞いて居ります所の日本とは樣子が違います、日本と云ふ國は開けた國で立派な國であると云ふことを聞いて居りましたが、どうも甚だ樣子か違います、其島の土人と云ふ者は誠に開けない所の民であります、町と云ふものもなく、又文明と云ふやうな狀態ではない、餘程そこは不思議に思ひましたが、コロンブスは矢張り日本と云ふ國であると思つたらしうございます、こゝで人種の問題が起るのは何うかと云へば、歐羅巴人が亞米利加に移住して參りました所が、歐羅巴人の文明と即ち印度人の文明と云ふものは非常に違ひがございます、斯ふ云う文明の程度の違つた所の人民が、何うして一緒に住むことが出來るか、何うして互に並んで行くことが出來るか、亞米利加の土人をして歐羅巴人と同じや

うな生活をせしむると云ふことは到底出來難いことであるが、何うすれば宜しいかと云ふことが是が人種問題の始りでございます、

英吉利人が亞米利加に渡りまして太西洋の海岸に殖民を致しました、北の方は新英國と稱へまして南の方はボルヂリヤと云ふやうな洲に殖民を致しましたが、初の中は英國の殖民等は亞米利加の土人よりして種々の補を受けたことがございます、例へば穀物が不作致しまして、最早飢餲に迫ると云ふやうな塲合に當りまして、土人よりして助けられ、さうして其飢渇を免れたと云ふやうなことが一度ならずございます、又英國の殖民が亞米利加の土人と交際する時に、中々土人に立派な性質のあることを認めました、彼等は中々事理の分つた者でございます、又隨分勇氣のある者で、人に對して隨分寛大の所もございましたが何うかすれば時々猜疑を起しまして、不都合のことなどもございましたけれども、初めの中には色々と英國の殖民が土人よりして補助を受けたと云ふことで、初めの中に彼等の補助がなかつたならば幼稚なる殖民地は到底繼續することが出來なかつたらう、亡びて仕舞つたらうと云ふ所からして、米國の土人のことに就ては色々心を痛めまして心配する人々がございましたけれども、又他の一方に於きましては、此亞米利加の土人と云ふ者が或事よりして殖民等に對して敵意を含みまして、方方の部落を攻撃するやうなことがございました、隨分危險のこともございました、戰爭が始まり遂には殖民して居る所の者は一歩たりとも武器を携へずしては外に出ることが出來ぬと云ふことになりました、家の中に妻子を置いて遠くに行くなれば其妻子を亡ぼし家を燒拂など云ふやうなことがございまして、始終危きことに出遭つたこともございます、

初めは兩方至つて仲よくして居りました、少數の英吉利人又其他の歐羅巴人の行つて居ります間は、互に仲を好くして互に智識を交換しやうと云ふ考で居つた、併し慥かに歐羅巴人は亞米利加人より優つて居る所がありましたのでありますから、例へば鐵砲もありますれば其他色々の武器もあり、又其家畜と云ふやうなものもありますれば色々便利の物もあり、中には其力の恐るべき物をも持つて居りました、故に亞米利加人の方から考へれば、自分等もサウ云ふことが出來るであらう必ず遣つて行けるであらうと思つて居つたが、悲しいことには最初少數の歐羅巴人が亞米利加に渡つて來たのは輙ち他日多くの歐羅巴人が此地に來ると云ふことを見ることが出來なかつた、サウして始めは彼等も歐羅巴人に對して好意を表して居りましたし、又歐羅巴人の方では印度人の有樣を見るに甚だ野蠻の者であつて耕作の道具も持たない、生活の狀態も誠に不完全の有樣をして居るから、何うかして彼等を助けてやりたい彼等を敎育しやう彼等を開いてやりたいと云ふ考からして、色々の職業を敎へ學校を建てゝやりましたり、色々のことをしてやりましたが、段々と何うも土人等が考へて見ると、此儘で追々歐羅巴人が多く亞米利加に這入つて來る時は、自分の國が危いと云ふ考を起すやうになつて來た、彼等の愛國心が段々起つて參りました、是は打擲つて置けないと云ふ所からして、遂に歐羅巴人を追拂はなければならないと云ふ考を起すやうになつたのでございます、サウして仕舞にはあそこに戰爭が起つたのでございます、殖民地は數個處ありましたが、何れもサウ云ふ風でございます、初めは互に仲を好くして居りましたが段々仲が惡くなり、亞米利加人は歐羅巴人を敵視し歐羅巴人は國の敵であるやうに考へ、又歐羅巴人は

土人は誠に信用をするとの出來ない者である、反覆常なく裏切をする者であるから少しも信用するとが出來ないと云ふやうになりましたが、何う云ふ譯で斯うなりましたかと云へば、是が即ち人種問題である、人種を異にし文明を異にずる所の者が一所に住ゐ、供に一所に生存して行くことが出來るかと云ふ問題が起つて來るのであります、

サウ云ふ事情でございますから、歐羅巴人の殖民が增加するに從つて亞米利加の土人は段々に西の方に追ひやられました、或時は戰爭をして多くの者が殺されたこともございます、或は勢力を以て一種族の者をズット西の方に移して仕舞つたこともございます、移住せしめたこともございます、軈て亞米利加の大陸の眞中にミスシッピー河と云ふのがあるが、アノ東の方には印度人は一人も居らないと云ふ程になつて仕舞ました、亞米利加政府——合衆國の政府が印度人に對する所の處置を申しますると、丁度外國人を取扱ふ——外國人に對するのと同樣な態度を有つて居りました、即ち條約を結んで、サウして亞米利加の内の或部分を限りまして是丈けの土地の内に生活をすることを許し、是丈けは印度人の領分と云ふことになつた、或時は政府から彼等の敎育費と云ふて金を與へたこともございます、又食物の料と云うて金を出したこともございます、けれども始終土人を取扱ふには亞米利加の國民としては取扱はない、亞米利加の法律の下にある人民としては取扱はないで全く別國の者を取扱ふやうにして、即ち亞米利加と離れたものとして制御して、今日も矢張り其通りになつて居ります、

今日亞米利加の土人の有樣は何うであるか、彼等の生活をして居る有樣を御覧になれば、殆ど歐羅巴人が初めて亞米利加に參りました時と同樣な生活をし

て居ります、三百年前の有様と今日の有様と大した違ひはありませぬ、固より時世が違つて居りますから變遷もありませうが、土人は出來る丈け習慣と同樣な生活をして居ります、例へば食物にすれば彼等は森林の中を自由に狩して弓を以て射留めた物を食用として居ります、衣服の如きは今日は政府から土人に與へられた物を以て着物として居るが、自分等は猛獸の皮を以て着物を造つて居ります、今日は亞米利加政府から毛布やら金布の着物を與へてそれを着て居ると云ふ有様でございますけれども、サウ云ふ諸般の違ひはありますけれども、先づ文明と云ふことから云へば三百年の前と同じ事と申しても宜い、何うしても開けて行くことが出來んやうに見える、そこで或人は斯う申します、全躰亞米利加の土人は文明に進むことの出來ない人種である、生れつき猛獸見たやうな者である、幾ら敎へやうと思つても無益であると云ふやうに言ふ人があります、成程土人の爲めに色々と敎育其他のことに就て盡した事業の歷史などを考へて見ますとサウ見えます、例へば今日亞米利加のニューザーランドと云ふのは北東の方でありますが、彼處の大學校――其大學校は本來は亞米利加の土人の爲めに建てた學校である、何うかして亞米利加の土人を敎育しやうと思つて建てゝ見ましたが、土人は何うしても學校に行くことを好まぬ、幾ら敎師を向けても本を與へても讀むことを好まない、此處に一人の土人の就學年齡に達した子供がある、そこで「貴方の子供を學校にやつては如何でございます」と勸めました所が、親の言ふのに「イヤ家の子供は學校にはやりません、家に居て獸を射ることも、馳けることも、敵が來れば戰爭することも、軍さすることも覺えて居ります、夫丈け覺えれば學校に行く必要はございません」と答へま

したヽそれで丁度昔の印度人もサウ云ふ生活をして居つたのでございませうヽ折角印度人の爲めに學校を設けたが何の役にも立ちませんヽ彼等は參らぬものでございますからヽ今日では歐羅巴より殖民した所の人が稽古する所の學校になつて居るヽ今日では大變な盛大の學校になつて居ると云ふ次第でございますヽ

只今亞米利加合衆國の人口は七千萬程ございますがヽ其中印度人と云ひますのは數千人に過ぎませんヽ萬とはあるかないかと云ふ位でございますから今日では印度人の爲めに危險であると云ふ考は頓と無くなつて仕舞つたのでございます彼等は亞米利加人の生活して居る所より離れた或一ツの圍ひ内に閉ぢこめられて居りまして出來る丈け野蠻の生活をして居るのでございますがヽ人に害を及ぼすと云ふことはないのでございますヽ打拋つて置けば何も仔細がないやうな譯でございますがヽ段々と彼等は人口が次第に少なくなつて仕舞つてヽ此儘にして置けば一人も殘らず死絶へると云ふ有樣でございますヽそれで好いとすればそれ丈けの話でございますがヽ亞米利加人の中に土人のことを大層に心配する人々がございますヽそれは何う云ふ譯だと云へばヽ全躰此土人と云ふ者は歐羅巴人が未だ亞米利加に來ない中から住つて居つた所の者でございますヽ然るに我等歐羅巴人は此處に來て彼等の國を先づ取つたのです彼等の國を取つて彼等を西の方に追ひやつてヽ今日では圍地の中に閉込めて仕舞つてヽ彼等が未だ最初野蠻の生活をして居つた時は野蠻ながら好い美風もあつたがヽ今日ではサウ云ふやうな好い部分は無くなつて仕舞つてヽ今日では何も役に立たない所の勇氣も無ければ働きも出來ない所の土人になつてヽ只毛布を身躰に卷付けて怠けて煙草を喫んで居つてヽ

一月に一遍程政府から牛肉を渡されてそれを食べて居ると云ふやうな哀れな有様となつたのは、實に憫むべき者である、決して捨置くことが出來ない見殺にすることが出來ないと云ふ人が段々にあるのでございます、

亞米利加に於てモウ一ッの人種の種別と云ふものがあります、それは印度の問題よりはモッと面倒な問題でございます、それは何う云ふことかと云へば、歐羅巴人が亞米利加に殖民を致しました時分に、働きをする者が足りません、最初の考は亞米利加の土人を捉へて彼等を使役しやうと云ふとでございましたが、中々サウ旨くいかない、亞米利加の土人と云ふ者は歐羅巴人に捉へられてサウ温柔しくして居ると云ふやうな者ではございません、到底駄目である、國は廣く人は少ない、何うして開墾しやうかと云ふとになりました所が、亞弗利加の黒奴と云ふ即ちニクローと云ふ者が骨格は大きく性質は至つて柔順の者でございます、之を亞米利加に持つて來て働かしたならば宜かろうと云ふので、英吉利人和蘭人等が亞弗利加の海岸に參り、一ヶ村二ヶ村位を取卷き其村を脅かし或は燒潰して仕舞つて、男も女も子供も皆持つて來て亞米利加に連れて來て賣るのでございます、恰も牛馬の如くに賣買しまして、彼等を段々教へて地を耕やさせたり木を伐らせたり、或は水地の所を疏水工事をさせたりした所が大變に役に立つ亞米利加の舊來の土人と違つて甚た從順である、黒奴も野蠻人ではありますが本國から連れて來られて最早何うすることも出來ない、且つ種々の方面からして黒奴を取つて參りますからして、黒奴同士でも一致して謀反することも出來ない、困つて仕舞つたから柔順しくして居る、そこで甚だ有益な者だからと云ふので、亞弗利加に參つては黒奴を捉へて亞米

利加に來て賣捌くので、英吉利人や和蘭人は非常な金儲をするやうになつて來ました、

此亞弗利加の黒奴と云ふのは、亞米利加に連れて來られる前に仕事をすることは多少知つて居つたのでございます、例へは土地を耕すことも知つて居る、又鐵や銅で道具を拵へることも知つて居る、故に亞米利加の土人よりは幾分か開けて居つたものでございますから、亞米利加に參つて　全く野蠻の人民を使ふのとは違つて幾らか便利でございました、それから段々彼等の知つて居ることを敎込んで使ふやうになつたのでございますが、亞米利加で奴隷を用ゐましたのは、始は北の方も南の方も同様に用ゐましたが、北の方は工業が盛になつて來たから黒奴では役に立たない、故に北の方では早く奴隷は使はないことになり、南の方に計り奴隷が行くやうになつた、或殖民地では五百人も奴隷を飼つて置いて開墾すると云ふやうなこともありました、其中で子供の中から怜悧さうなのは寄り拔きまして之を主人の家に養いまして色々と下男の働きやら大工のことやら鍛冶屋のことやら日用の仕事を敎へるやうになつて此黒奴と云ふ者か奴隷として使はれたには違ひありませんが、其使はれて居る間に一種の敎育は受けて居つたのでございます、或點迄は文明の途に進んだのでございます、彼等は本國から來た時は國語と云ふべき程の者もございませんが、使はれて居る中に本を讀むことは出來ませんし字を書くことは出來ませんでも、英語を口で言い又他の言ふことが大凡解る位になりました、中には色々のことが出來るやうになりましたが、後に至つて此奴隷を使ふ使はないと云ふ所から亞米利加に於て大議論が起りまして、彼の南北戰爭と云ふ大戰爭が起りましたが、北の方では奴隷を使ふ所はない重に南の方で土地を耕した

りなどして居つたのでございます

此奴隷を使ふと云ふことに就ては抑も亞米利加合衆國の建設の時よりして議論があつたのでございますが、此の方では奴隷を使ふのは不正のことであると云ふ議論があり、南の方に於ては不正でないとまでは言ひませんが、使つても差支ないと云ふ議論が盛になり段々議論が烈しくなつて、一千八百六十一年に於て彼の亞米利加の南北大戰爭と云ふものが起つて參つたのでございます、此戰爭の結果と致しまして當時亞米利加合衆國にありました所の奴隷と云ふ者は四百萬程ございましたが、是が全く自由になつた、是迄は奴隷として牛馬の如く遣はれた者が法律の結果として全く自由の者になりました、自由の者になつたと云ふことは亞米利加に於ては大抵國民たる所の者は投票の權を有して居る――國會議員を選擧するの權を有して居る、其權を與へられました、法律に於てはサウ云ふ風に自由になつたが實際はサウいかない、何となれば南の方に居る人は彼等を使つて居つた所の者でございます、彼等の支配せられて居つた所の者でございます、法律では自由の者であり同じく亞米利加の人民となりましたが實際には自由に正當の權利を用ゆると云ふことは出來ないことであつて、彼等は人から使はれること丈けを覺えたので、自分で働く丈けの考はない、勿論學問も何もないのでございます、サウ云ふ有樣であつた、所で亞米利加の國體と致しまして國民たる者は自由の權を有つて居る投票の權を有つて居りますけれども、其投票の權を有つて居る所の者は自分の事計りでなく自分の國のことをも――能くそれ等のことに就て判斷をする力を有つて居らなければならんと云ふ國の組織になつて居りますのであります、けれども無教育にして投票することの出來ない者が澤

山あります、それは何う云ふ者であるかと云へば昔奴隷として使はれて居つた者、南北戰爭の結果として自由を與へられた所の此彼等の子孫は尙更ら權利を行ふことなどは知りませぬ、サウ云ふ有樣になつて亞米利加に居るのでございますから、亞米利加に於ける是が一ツの人種の問題でございます、

此南北戰爭の終りに黑奴の數は四百萬と云ふことを申上げましたが、今日では亞米利加の全躰で八百萬人から一千萬人程ございます、此八百萬乃至一千萬の黑奴を敎育して良い所の亞米利加の國民にしやうと云ふのが問題でございますが、何うすれば之を良くすることが出來るか、大凡幾年程掛かれば其目的を達することが出來るかと云ふことの大問題が玆にあるのでございます、若し出來るなれば一度皆さんを亞米利加の黑奴の住んで居る所に連れて行つて御目に掛けたい位でございます、一部屋の中に祖母さんも高祖母さんも孫も玄孫もと云ふやうに四代程往〻一ツの部屋に住まつて居ります、憐むべき姿をして床の上に居ります、行儀と云ふことも無ければ淸潔と云ふことも無ければ、只其處に居る、彼等の一家族は朝早く綿を作る畑に行つて日の暮方に歸つて來る、サウして歸つて彼等は眠りに就くと云ふ丈けでございます、其有樣と云ふものは彼等が自由を得ない時、奴隷として使はれて居つた時と一向變らない、何うも一向能くなつたと言へない有樣でございます、斯う云ふ黑奴を何うして敎育し何うして宜い所の健全なる亞米利加人にすることが出來るか、之を爲し遂げたいと言ふのが問題でございます、僅か數千人の者なれば格別心配するにも及びますまいけれども、八百人から一千万人程も斯う云ふ人民が居るのでございますから何うすれば好いか、私の考へます所では、一國の文明と云ふものは國民全躰が

文明に進んで行かなければ何うしても全き文明と言はれない、全躰擧つて文明の道に進んで行くことにならなければならないが、此殆んど一千万の黒奴を何うして左樣に敎育するかと云ふの問題でございます、初めに申した通り、印度人の彼等を敎育することとに就て心配する人があると申しましたが、それよりも數が多く關係も多い亞米利加の黒奴に就いては色々と心配する人がございます、此ことに就て悉く、御話することは出來ませんが、簡單に此黒奴と印度人とが何う云ふ風にして居るかと云ふことを終りに一寸申上やうと思ひます

南北戰爭のありました時に、北の方で大學に在りし所の生徒の中で、國家の爲めに學問を止めて軍隊に這入つて戰爭をした所の者が澤山ございます、戰爭が終りました時にサウ云ふ若い人は或は再び學校に這入つて學問をした人もありまするし、又中には直ぐに實業に從事した人もございますが、玆に一人戰爭中にも大層戰功を顯した所の青年がありまして、其人は元と少尉で戰爭に出ましたが、戰爭の終つた時は段々と立身をして將軍になつたのでございますが、戰爭は終つたが尙ほ是からは黒奴の爲めに——ニクロースの爲めに盡力をしなければならんと云ふことを深く感じたのでございます、サウして其仕事をしたのでございますが、何う云ふやうに此人は仕事をしたかと云ふと、マア斯う云ふ譯でございます奴隸は是まで主人の爲めに朝から晩まで働き働いて働くこと計りをして書物を讀むとか學問するとか云ふことは出來ない、併し今度は自由の身になつたのでございますから、彼等の考に「自分は始終働いて居る、持主は本計り讀んで居る、何うして斯う云ふことであるか、吾々も本を讀むことが出來れば樂な生活をすることが出來るであらう」と云ふやうな

考を起した、スペルリングでも出來れば豪い仕事でも出來るやうな考を持つたのでありますがそこで此軍人は、彼等に於ては斯う云ふ考があるから其機會を失はず勞働即ち働きと云ふこと丶學問をすると云ふこと丶、此二ツのことを合せて一ッ教育しやうと云ふ考を持つた、サウして黑奴の爲めに一ッの學校を建てた、他の人の考では黑奴と云ふ者は二百五十年來先祖代々働いて居つたのだから働くと云ふことは覺えないでも敎へないでも宜からう、彼に學問さへ敎へれば宜からうと云ふ考があつた、併し此軍人はそれはいけない、彼等の親彼等の兩親は働くことを覺えて居つたが、今育つ所の者は何も知らない、兩親は働くことと計りして居つたから何うか子供には學問をさせたい働くことをさせたくないと云ふてはいけない、全体亞米利加の土人は何うしても文明に進むことが出來なかつたので、是に反して黑奴は文明に進むことが出來たのは勞働をしたが爲めで勞働の爲めに多少文明に進んだのであるから、それを失なはせてはいかんと云ふので、是はアームストローンと云ふ人でございますが、此人がサウ云ふ學校を一ッ建て丶、生徒を學校に入れて、一方に於ては書物を讀むことを敎へ一方に於ては畑を作らせましたり大工をさせたり、色々の勞働をさせて一方に於ては學問と云ふやうに兩方をさせて彼等を段々と敎育すると云ふ方針を取つて參りました、

此アームストローンと云ふ人が黑奴の爲めに建てた所の學校は、意外に成功して人々が見て驚きました、其一人の卒業生は米國に於て今日は能辯家となつて世界に名を知られて居る人がございます、其人が學校に來た時の話をすれば、此人はボルジニアの西の方に住つて居つたのでございますが、若い時分にアームストローンの學校のとを聞いて、太平洋の海岸

にある所のハヷトンの學校でございますが其學校に這入りたいと云ふ考を起しまして、一生懸命に働き金を拵へ鐵道に乘りまして、リチモンドと云ふ所でボルヂニアのハヷトンと云ふ所には六十哩ばかりある、此鐵道に乘つて往けば懷が空になるから錢を使はずに持つて行かうと云ふ考を起して、鐵道から降りて其夜は宿屋に寢ることが出來ませんで橋の下に寢て居つた、サゥして翌朝早く立つて學校まで歩いて行かうと思つた所が、大事の金が無くなつて仕舞つた、能く寢て居る中に取られて仕舞つた、たつた五十錢程殘つたから、此六十哩の所を漸く歩いて學校に行つて、甚た見苦しい風姿をして校長に面會を求め「學校に入れて下さい」と云ふことを願ひました、所が校長は之を見て言ふには「何うも直ぐ入れることは出來ない、學校に來る者は幾分か金を持て來て金を預けなければならんことになつて居るが、一文も無いと云ふことでは學校に入れることが出來ない」と斷はられたから非常に弱つた、此弱つた有樣を見て校長が「何うも生徒にすると云ふことは出來んが餘り氣の毒だから舍監の婦人の某と云ふ人があるから此舍監に會つて話して見たら宜からう」斯う云ふことで舍監の所に行つた、所が舍監の婦人が言ふには「貴方は働くことが出來ますか、仕事をすることが出來ますか」「何樣な仕事でございます」「部屋を掃くことが出來ますか、部屋の掃除をしたことがありますか」「別に是まで部屋の掃き掃除をしたこともございませんが出來ないこともありますまい」「それではやつて御覽」と云ふので箒を其者の前に出して自分は外へ出て行つて仕舞つた、奇躰な學校があればあるもので、入學試驗に部屋の掃除をしろと云ふ、不思議なことゝ思つたがこゝが大切と思ひまして、若しも部屋の掃除をするならば或は勉

強することを許されるかも知れないと考へて此男は出來る丈け奇麗に掃除をして待つて居りました、すると其婦人はやがて歸つて來て「大變奇麗に掃除が出來ました、貴方は働くことを知つて居るから宜しい、働くことを知らなければ這入ることが出來ないが働くことを知つて居るから入れて上げる」と云ふ斯う云ふやうな事情で入學しましたが、それが卒業の後アラハマと云ふ所の黒奴の爲めに建てゝある師範學校でございませう、其校長になりました、サウして二十四五年程やつて居る中に其學校を立派な學校にした、而して自分も段々立派な人間になつて、今日亞米利加に於て有數の能辯家になつたのでございます、是が即ちアームストローン氏の卒業生で、其結果の一人でございます、

此ハヴトン學校と云ふのは、初めは極く小さく極く微弱のものでございましたけれども、段々と盛んになり生長しまして、今日では盛大なる學校になつて、大凡三十年前に出來た學校でございますが今日では學校の中に村が出來て居る、黒奴や何かの生徒が居りまして學問ばかりでなく實業を學んで居り、機を織ることを學んで居る者もあり又は鍛冶屋の仕事をする者もあると云ふやうに、其種類を云へば十五から二十程の實業を學んで居ります、一週間に四日は勉強して二日は勞働をすると云ふやうな仕組になつて盛んなものになつて居りますが、是はもと黒奴の爲めに建てられた學校でございますけれども、學校が出來てから十一年計りの時に、二十人程亞米利加の土人で生捕にした所の者を學校に連れて來まして何うか此學校で一ツ黒奴と同じく亞米利加の土人も敎育することは出來まいかと云ふのでやりました、黒奴とは違つて氣の荒い戰爭ばかりしたがつて、敵さへ見れば喧嘩をし鉄砲などを持つて居りましたが

鉄砲などは取上げて專ら畑を耕すと云ふ仕事をやらせたのでありますが、段々之をやらせた所が次第に學ぶやうになりましてございます、丸で彼の平常して居つたことゝ、學校に居る有様と云ふものは違つた境遇にした、例へば印度の土人の習慣から云へば、旅をする時にも男の方は馬に乘つて來る、サウすると女は後から附いて來る、然も荷物を背負せられて居る、男は毛布を着て網を下げて來ると女はそれに從つて歩いて來ると云ふやうな有様でありました、此印度人が學校に來る時分に、校長も一所に迎ひに出ました所が、之に會うと直ぐ亞米利加の土人の方は、女の方を車に乘せて男の方を歩かせるやうにしました、學校に居ると云ふ以上には彼等の長い髪の毛も切つて仕舞ひ散髪にして、全く變つた所の境遇に移し、今日では印度人の教育も致し、色々の有益なる實業を教へて居るのでございます、

此學校のことに就て詳しく御話することは出來ませんが、只モウ一言實際上の結果に就て述べたいと思ふ、是は黒奴即ちくろんぼの教育のことや何かに就て實際に見る所でございまして、私も實地見たのでございますが、今日亞米利加の南の方に行つて黒奴の住んで居る村に行つて見ると、ハヴトン出身の者の居る村は他の村とは全く違つた所がある、ハヴトン卒業生が住んで居ると云ふことは一目して知ることが出來る、何うして知るかと云へば、其學校の生徒の居る村は一層清潔でございます、一層其人民が勉強いたします、又白人の方から金を借りると云ふやうなことも少ない、餘程進歩して居る所がございます、實際にさう云ふことがございます、それは一ツ或は二ツの村ではなくして――ハヴトンから出る卒業生は此南の方の村々に配附せられる、サウして教育事業をして居るのでございますが、どれ丈けハ

ヴトンの學校が大いなる働きをなして居るかと云ふことが解らうと思ひます、又黑奴の住つて居る所ばかりでなく、亞米利加の土人の住つて居る所に行つてもハヴトンの卒業生の居る所は著しく違ひがある、フランケットを躰に巻付けて煙草を喫んで怠けて居ると云ふやうな印度人は少ない、皆働き皆勉強する、且つ皆正直であると云ふやうな所が、他の村に較べて著しく見ることが出來る、依つて亞米利加の人種問題と云ふことは困難な問題には相違ありませぬが、正しき方法を以てすれば此問題を解釋することが出來やうと思ひます、今日は私が此ハブトン學校のことに就て御話したのは蓋し其譯でございます、此様な正しき目的と方法とを以て居れば其事が出來ると云ふのであります、先年或刺客の爲めに暗殺せられましたカーフヰルドと云ふ大統領が居りましたが、あの人も學校のことに就て熱心なる一人でありますが、あの人が演說したことがある、其言ふことば最も肯綮に當つて居るやうに思ふ、斯う言ふ言葉であります、此亞米利加の土人と黑奴に對することであります、亞米利加の土人に向つては人間は何うしても働くべき者である、勞働と云ふことは人間のしなければならんとであると云ふことを敎へる、又黑奴に對しては、人間の自由と云ふことは勞働に伴なふものであると云ふことを敎へると云ふことが必要であらうと思ふ、斯う云ふやうにして行くなれば此問題は困難なことではありますが、久しき間には此問題を解釋することが出來るであらうと思ひます、是が私の今日學校の御話をした譯でございます、

今日は長い間御話しましたのに、克く御聞き下すつて有難うございます、此後ハヴトンの學校と云ふことを御聞きになつたならば、其學校は何う云ふ仕事

をして居るものであるか、此學校を建てた所の人は誰であるか、即ちアームストローン將軍であると云ふことを御記憶にならんことを希望いたしまする

（完）



寄書

肺病者養生法（其七）

醫學士　竹中成憲君

談話の事

長談及精神を感動する談話は害あり殊に夜間は長談を厳禁し諸人の群集する所に立ち寄るは宜しからず故に劇場寄席演說場抔に行く事は避くるが宜し就中人の疾病に關する談話を厳禁す志深きものには政談宜しからず

肺病患者に密接して談話せんとするときには患者の呼氣（いき）を嗅かざる樣注意すべし即ち患者の呼吸を窺ひ患者空氣を吐き出すときは己れ（健者）も空氣を患者に向て吐き出し患者空氣を吸ふとき己れも（可成他の淸潔なる方面より）空氣を吸ふ樣にすべし醫師にして重症患者の胸部を聽診するものは注意すべき事なり

勉强之事

鬱氣少もなく氣分の宜き時胸を反らして書見するは害なけれども床の裡に俯して讀書する如きは有害にして寧ろ仰向けになりて讀書するに如かざるなり而て可成家計の事に心配せぬ樣注意すべし

讀書には見臺の高きもの習字等にも机の高きものを用ゆべし

氣慨精神の沈衰したるものは力めて自から心を鼓舞し傍ら福澤先生中村先生等の著述に係る立志編の類を熟讀し又英雄豪傑の傳を讀むも可なり

天保時代までの親は子に諭して曰く「汝は遊ぶべからず」と諭し「何も爲さずに居る勿れ」てふ意なり然るに今學校に於て用ゆる讀本には何と記しあるや多くは歐羅巴の書を其まゝ直譯しあるを以て中には「汝は善く遊べ」と記しあり此後者の「遊ぶ」は英語の「プレー」獨逸語の「スピールレン」にして體育的遊戯をいふなり前者の「遊ぶ」と其意味を異にしたるや明なりといへども維新前の人々は體育に重きを置かざりしは事實なり

拙者の如きも現に父より路頭に竹輪を轉し、凧を昇る等の事は町家小兒の爲すべき事にしていやしくも武士の兒たるものゝ爲すべきものにあらずと常に諭されたり又「蒙求」の如き書を讀ませられ「見よ此人は雪の光にて讀書せり」「見よ此人は螢の光にて然り」「見よ此人は頸に繩を纏ふて然り」「見よ此人は睡氣來らば膝に錐を立てり」等の事を示されたり

幸に此の如き勉强法に今日の敎育家は賛成を表さず

職業之事

室內にて勉强する業即ち座職は宜しからず故に官吏(大抵)學校書生敎員學者商家の番頭等は宜からず、幼年にして肺病の血統あるものは戶外に於ける業に從事せしむべし假令ば植物學者(植木屋も然り)航海者(船頭も然り)山林學者總て(山林に關する業)農學者(耕作に關する業故に農夫も然り)體操の敎師、獵人等是なり既に座職に從事する人は其宜しからざる事を了解し務めて身體の運動を行ひ己れの業の惡しきを償ふべし

投機事業の如きは最不健康なり

古來人生五十と稱す細川賴之詩あり人生五十愧無功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅掃難去、起尋禪榻臥淸風、然れ共是れ學說にあらざるなり之を醫書に鑑みるに人生は五十歲以下なり明治廿四年末東京府の調査に依れば平均三十三歲なり

內務省に於て調査せる明治三十年十二月末現在の統計に依れは全國戶數八、〇〇四、八四九人口四二、七〇八、二六四內男二一、五六一、〇二三女二一、一四七、二四一にして之を生年別とするときは一年より九十九年までのもの男女合せて二一、五六〇、八〇七百年以上百十一年までのもの二一六內男四四女一七二なりとす而して更に百年以上のものを年別とすれば左の如し

年	男	女	計
百年	一〇	六五	計七五
百一年	一二	三三	計四五
百二年	六	三六	計四二
百三年	七	一八	計二五
百四年	四	七	計一一
百五年	二	四	計六
百六年	〇	五	計五
百七年	一	一	計二
百八年	一	一	計二
百九年	〇	二	計二
百十一年	一	〇	計二

總て高齡に達するものは男子より女子に多しと知るべし

又西洋人肉食の爲め命數長しと考ふは誤なり之を醫書に溫ぬるに三十六年乃至四十年なり而して之を職業別となすときは左の如し

僧侶最も長命	六十五歲乃至六十八歲なり
高等官吏	五十六歲乃至六十八歲なり
富裕商人	同上
辯護士教員醫師	五十二歲乃至五十四歲
美術職工	同上
日雇	凡そ三十歲

一說に身體若くは精神に缺點あるものは配偶を得る事難し而して此缺點あるものに死者多かるべきは明なるかゆゑに結婚者は長命にして非婚者は短命なりといふは原因と結果(因果)を顚倒したるものなりと是亦一理

にして死亡するもの　最も多く百歳の壽を得るものは一萬人中一人九十歳に達するものは五百人中一人六十歳に達するものは百人中一人の割合にして結婚者は概して未婚者より命長し

ドクトル、シユワルフ氏(伯林)は四十年なる既婚者百二十五人未婚者七十五人に就て餘命數を實驗し結婚者は二倍餘長きとを左の如く證明せり

種別	六十年	七十年	九十年
既婚者	四八	二七	九
未婚者	二二	一一	三

六十年七十年に達すれは結婚者の餘命は二倍餘にして九十年に至れは三倍となるなり

内閣諸公の壽命　大日本衞生會の調査に依る時は人間の壽命は少年の者より老年の者が比較的長壽を保つ割合にて譬は本年十歳なる幼者は向ふ四十七年九四生存し五十歳の者は向ふ十九年七九生存する割合なり此比較を以て現内閣諸公の壽命を割出す時は左の如し即ち明治五十一年が命數全く盡くるの時なり

(明治三十年算)

伊藤總理は本年五十四歳なるを以て向ふ十五年〇一即ち明治四十五年同侯七十一歳迄

野村内相は五十三歳なるを以て向ふ十七年七一明治四十五年同子七十一歳迄

陸奥外相は五十歳なるを以て向ふ十九年、七九明治四十八年同子六十九歳迄

右の割合なりし處人の知る如く本病の爲め薨せられたり

大山寺は五十二歳なるを以て向ふ十八年、四〇同伯七十歳迄

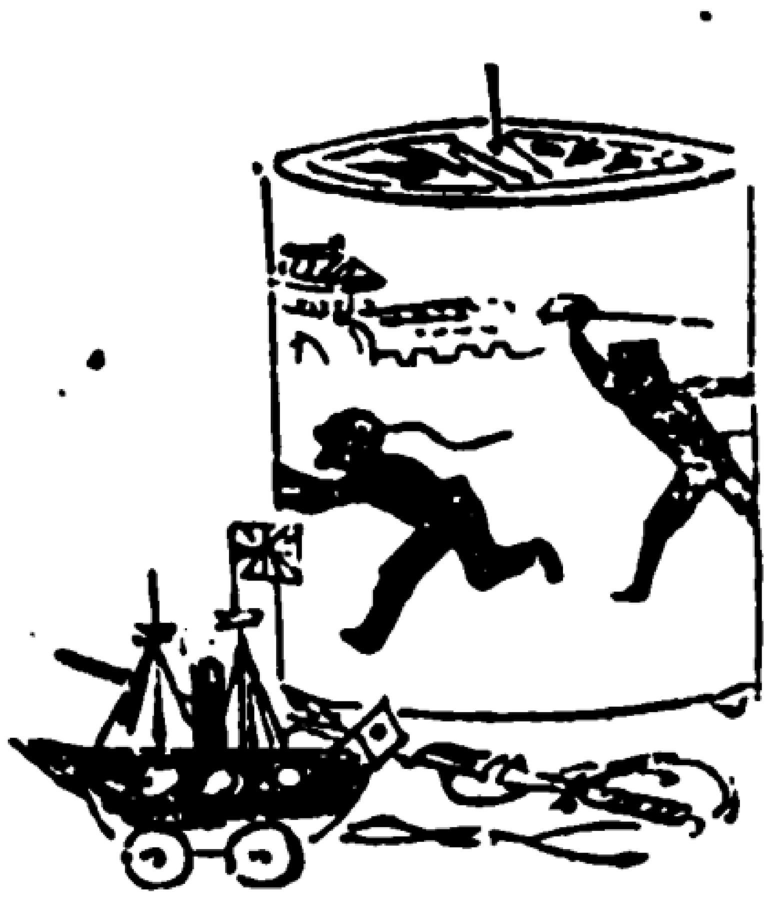
西郷伯は五十一歳なるを以て向ふ十九年一〇同伯七十歳迄

松方伯は六十歳なるを以て向ふ十二年九六同伯七十二歳迄

西園寺侯は四十五歳なるを以て向ふ二十三年二九明治五十一年同侯六十八歳迄

榎本子は五十八歳なるを以て向ふ十四年二三明治四十二年迄

左記の一章は金杉英五郎君の物せる一節なるが是は敢て氏の説にあらずして西書多くは此算法を用ゆるなり





皮膚病の話（第五）

編者曰皮膚の解剖生理等のことは先きに本誌第百二十六號に於て起稿者の通俗的に記述せし處なるが左の一篇は學理的に渉るを以て一時掲載を見合せしが今回卷聊か首に掲げし如き皮膚の断面圖を得たれば參照の爲め再び玆に詳述することゝはなしぬ讀者諒せられよ

在大學　T.　S.

皮膚の解剖

皮膚は三層より成る表皮膚眞皮膚及下結締織層是にて其狀恰も地層を見るか如し、（口畵を參照せよ）表皮膚の下部は柵狀の陥凹を呈し此層の細胞は其下部に在りては圓柱狀をなせ共上部に至るに從ひ篇平となり漸次角質變性を成し終に剝離する者也、

眞皮膚は表皮膚の下に位し結締織纖維、彈力纖維及び筋纖維より成り更に分ちて網狀層及び乳頭層の二とす、乳頭層は、乳頭狀の隆起をなして表皮膚の陥凹部中に箝入す血管は毛細動脉となりて眞皮の上層に至り乳頭中に血管網を形成して後毛細靜脉となりて皮下結締織中に入る以上の外血管は眞皮中に在りて上下二種、血管網を形成し其上なる者は乳頭の下部に位し其下なる者は眞皮膚の底部に位す淋巴管は乳頭の下部上血管網の下に在りて淋巴管網を形成す神經は血管に添ふて走り眞皮及び表皮膚中に存する特別なる神經終末器管に終る、是等の終末器管の眞皮中に存する者は「パチニー」氏（或は「ファーテル」氏）小躰及び「マイスチル」氏小躰等にして表皮中に在りては神經纖維は細微の小纖維となりて髓鞘と

云へる被を失ひ終に小結節を成して細胞の内外に終り或は一種の小板となりて終る者なり、血管内部の細胞及毛根鞘及び腺等に於ける神經終末も亦之と同樣なる者なるが如し

汗腺の原は皮下結締織中に在りて迂曲せる糸毬狀をなし之より眞皮膚中に至れば眞直となれとも表皮中に入れば再び螺旋狀に回轉して終に皮膚の表面に開口す、此腺は獨り汗を分泌するに止まらずして皮膚の表面を滑にすべき一種の脂腺物を分泌す、手掌足の裏腋下肛門の周圍耳の孔等の常に濕潤し在るは蓋し此腺の存することと多きによる也

毛は其上部表皮の外に存する部分の毛經と云ひ、皮膚中に埋沒する部分を毛根と云ふ、毛根の下端は膨大す之を毛球と云ふ、其狀恰も樹木の地上に植立するが如し皮膚中毛根の周圍に位せる部分を毛嚢と云ひ其下部毛球の底部に在りては一個の乳頭を成して毛球中に突出す之をも乳頭と云ひ眞皮層より成り其中に巨多の血管神經を含蓄す、

毛嚢の上部に至れば毛嚢腺又は皮脂腺なる者ありて其中に開口す（此腺は元より毛の存せさる部分例ば下唇眼瞼緣等こそ存するとも以上の外、毛に密接の關係を有する者は立毛筋と稱する滑平筋纖維にして眞皮に起り毛嚢に付著する者なり、此筋の作用は其收縮するに當り毛髪を直立せしめ且つ皮脂腺の内容を搾出するに在り毛の色素は主として毛球中に存する者也、皮膚の色は表皮膚の下部に存する棘狀細胞と稱する細胞中に存する色素顆粒の爲めに生する者也、

爪も亦皮膚の變形したる者にして毛の如く角質變化をなせる細胞より成り爪床の上に位す、其左右及ひ其上端に爪廓より被われつゝ皺襞に移行す、皺襞の底部には常に細胞の新生を營み之によりて爪の新陳

代謝を經營す、
皮下結締織層は彈力纖維を混せる結締織層より成り其空隙は脂肪を以て滿されど眼瞼、口脣、鼻及び耳殼に於ては脂肪の量比較的小なる者也、

皮膚の生理

皮膚は動物躰の保護器管となり或は感覺器管とも爲り或は排泄器管とも爲り或は亦躰温の調節器管とも成る者にして其皮下結締織は巨多の脂肪を有するか故に恰も彼の枕夜具の類に綿を塡むるが如く或は亦貴重なる物品を箱に納むるに當り綿或は毛の如き柔かき物品にて其空隙を塡むると同じく人躰の諸所の陷凹を塡め或は血管神經の如き貴重なる器管を覆ひて外部の刺戟を被ること少からしめ其表皮は亦角質に變性し有るが故に諸種の毒物を防ぐに適す、亦知覺器管としては觸神壓神痛神は勿論寒暖の知覺を受領し排泄器管としては勿論其量に於ては遙に小なれ共酸素を級收して炭酸及水を排泄す是等の作用は總て汗腺の掌とる處にして此の腺の作用は實に神經系統の直接影響による者也、されば血管を擴張せしむる神經を刺戟せは肝腺の分泌を盛ならしむ之に反して血管を收縮せしむるところの神經を刺戟せは汗の分泌を減少す熱き温度或は筋を勞せし時或は精神上の刺戟を受けし時或は「ピロガルピン」「ムスカリン」等の藥劑を用ゐし時に汗の分泌盛にして寒き空氣の時或は「アトロピン」「アガラチン」等の藥を用ひし時に汗分泌の減少するは蓋し上の理による也汗腺の作用が神經の影况による證據としては外科手術にて切斷せし足を取り其交感神經を刺戟する時は發汗するを見ても分るべし

汗は酸性の反應を有すれとも之れ恐くは汗と表皮の浸出液とが混合するが爲めにして本來汗は「アルカリー性の反應を呈する者なるが如し、汗の内には尿

素は勿論其分解物たる「アンモニア」「インディゴ」「ヒドロフタリン」「ヒドロペプシン」等の外表皮の剝離したる者脂肪滴脂の分解せる者及ひ諸種の黴菌を含蓄す、されど其主成分は水にして凡そ汗の九十九%は水より成る者と見て可也、

脂皮腺の分泌は神經の影響を受けず、其分泌物なる皮脂の作用は前條述ぶるが如し、

皮膚の吸收作用は分泌作用に比すれば遥に微々たる者にして氣体液体の如きは僅に之を吸收すれども稀には細末なる固体と雖も亦吸收せらるゝ者有り沃度鉀「ナフトール」の如き是也、水銀に至りては其吸收せらるゝこと頗る速なり、亦諸種の油或は「アルコール」「エーテル」「コロヽホルム」等にて溶解せる「アルカリ」鹽類或は油に混じたる砒石の如きも亦吸收せらる、

多少負傷せる皮膚或は焮衝せる皮膚に於ては吸收遥に大なりとす、されど最近某學者の研究によれば健康なる皮膚に用ゐたる藥液は其瓦斯狀たると液狀たると或は其効藥たるとを問はず少も吸收せられざる者にして彼の沐浴の際にも水の吸收せられざるは勿論其内に溶解せる藥液も亦健康なる皮膚よりは少も吸收せられざる者とす、

温の調節器としては皮膚は單に温の惡導体なるが故に外部の温度の爲めに体温の急に影響せらるゝことなきよう又体温の急に奪はるゝことなきよう調節する者也表皮薄ければ体温を奪はるゝこと多きが故に如此人は冷氣を感すること甚し、

皮膚疾患の原因

皮膚疾患の原因に至りては其原因の不明なる者頗る多しと雖も恐くは其大部は外界の影響殊に傳染性の者に因する者多きが如し、實に諸種の皮膚病が動物性或は植物性の寄生物によりて發することは明な

る事實にして今後細菌學の増々進歩するに從ひ是等病原一發見も増々多かる可く從て之に對する豫防法も一新面目を開くことならん、

さて動物性寄生虫には、頭虱、耻虱、衣虱、蚤、床虫等の如く皮膚の上面に生活する者あり、或は疥癬蟲、毛嚢蟲、秋蝨等の如く表皮中に生活する者あり或は「ギナア」蟲或は「チスチ・エルクス」等の如く遙に皮下結締織中に浸入する者あり、

植物性寄生物に就ては未だ不明の者頗る多く今日吾人の皮膚病の原因なりと認むる處の者は「ミクロスポーロン、フルフル」「ミクロス、ポーロン、ミヌティスシム」等六七種に過ぎず、

黴菌に至りては狼瘡、癩病の如きが其黴菌によりて發生することは慥なれども黴毒の黴菌等に亘りては未だ其果して其病因たるや否やを疑はさる可らさる者多し、兎に角是等傳染性皮膚疾患の發生には氣候の關係、患者平生の生活狀態、以前に疾みたる疾病、年齡、遺傳等の大影況を有することは疑ふべからざる事實なるが如し、

以上の外機械的熱液化學的及中毒的影響例令ば皮膚を壓するが如き或は摩擦するが如き或は暖氣に觸るるが如き或は日光に暴露するが如き或有毒なる分泌物藥液の如きに觸るゝが如き諸種の外界の刺戟が皮膚疾患の原となることあり、

内因に至りては人々の特異性により一定の食物或は藥品を使用せし爲めに皮膚疾患を起すことあり、或は種々の神經系統疾病の爲めに皮膚疾患を生ずることあり、或は血液と共に血管中を循環する黴菌の爲めに或は是等黴菌の生ずる毒物の爲めに或は血液循環の器械的障害の爲めに或は血管疾病の爲めに或は血液成分變化の爲めに或は腸胃、排泄器等種々の臟器の疾患の爲めに皮膚、疾患を起すことあり、勿論

此場合に於ても上述の如く患者の生活狀態年齡氣候等が大影響を及ぼすことは疑ふべからざる事實なり、

第二皮膚病の話（其六）

在大學　T.S.

今回は皮膚より色の消滅する病に就て述ぶべし、此病には二種類ありて一は先天性の物にて一は後天性の物なり、

一　しらこ（汎發性皮膚變白症）の話

しらこといふは屢世間に見る所の物なるが是れ先天性にて全身の皮膚に全く色素を缺如する病なり、只に皮膚のみならず皮膚の一種なる毛髮は勿論眼の玉まで色素を含まずして其狀恰も白兎の眼球を見るが如き觀を呈するものなり、されば其結果として此患者は常に羞明症及び眼球震顫症を患ふること殆んど常なり、

同じく先天性の物などもしらこの如く甚だしからずして皮膚の一部分殊に一定の神經の經過に添うて色素を含まざる事あり之を限局性皮膚變白症と云ふ

二　しろなまず（白癜風）

此病は亦白斑病といひ意地惡くも色素の少なき白哲人種には少なくして色素の多き黃色若くは黑色人種には殊に多く來る病なり此病は甚だ多き病にて色素の消滅せる部分の周圍は色素殊に多きが故に一層眼にたちて不幸にも顏面等に生じたる場合には甚しく不體裁なり、

此病の起るや初め先色素のなき少點を生じ此部分は其表面少しく凸出す此小點は漸次擴がりて近傍にも亦同樣の小點を生じ遂には相合して種々の斑紋を生じ甚しきに至りては殆んど全身に擴がる事もありといふ、

白なまずの處に生ずるものも亦色素を失つて白毛となるものとす色素こそは失へども其他の點にては少しも通常の皮膚と異なる事なし但し癩病の爲に生ぜる白なまずにては其部分の知覺消滅するものなり
原因は別に之といふ可き原因なくして不意に生ずる物もあれど又疱瘡、猩紅熱等の如き病の後に發り又種々の神經系の病幷に全身病の後等にも發生し又梅毒癩病等の人にも發る事あり此に注意す可きは同じく白なまずの一種にて海水浴をなせし後強く日光に曝せし皮膚に色素を含まざる小點を生ずることあれば海浴を試らるゝ方は強き日光に皮膚を曝ぬやう注意せらる可し、
治療は是といふ特功のものなしイヒチオールアルコールは小兒の白なまずには頗る效用ありといふ其他又ピロガロールアルコールを用て功を奏せし人もありといふ兎に角白なまずは運よくば一定の度にて其蔓延を中止する物なれば顔等に是ありて苦にせらるる人々は種々の化粧藥もある事故之を使用し玉へば可なり、
以上にて皮膚色素の病の事は大略述べたれば是より屢皮膚に生ずる魚の目（前號掲出）イボ等の類に就て述ぶべし、

たこ（胼胝）の話

たこも亦魚の目等と同じく外皮表は層の肥厚する病なるがたこにては其度魚の目に比すれば遙に輕く其代りに其大さはかなり廣く中には殆んど全手掌や蹠面がたこと化する事あり、たこの特有なるは周圍の組織との移行が徐々なる事なり、
たこの原因も亦魚の目と同じく長時の間壓を受くる爲めにして從て手を多く使用する職工の手の掌や跣足にて歩行する百姓の足の蹠面や絕へず筆を使用する人の指の側面抔に最も多く生ずる者なり、

たこは其部分が多少觸感を失ふ位の事にて別に甚しき害をなさざれども高度の者に至りては屢々患者をして細密なる仕事を爲す事能はざらしめ又屢々たこの表面には裂創を生じ患者に少くなからぬ苦痛を與ふる事あり、

治療は魚の目と同じく撒里失爾酸軟膏にても貼付し置かば可也、



看護法

普通看護法（其三）

（前號の續）

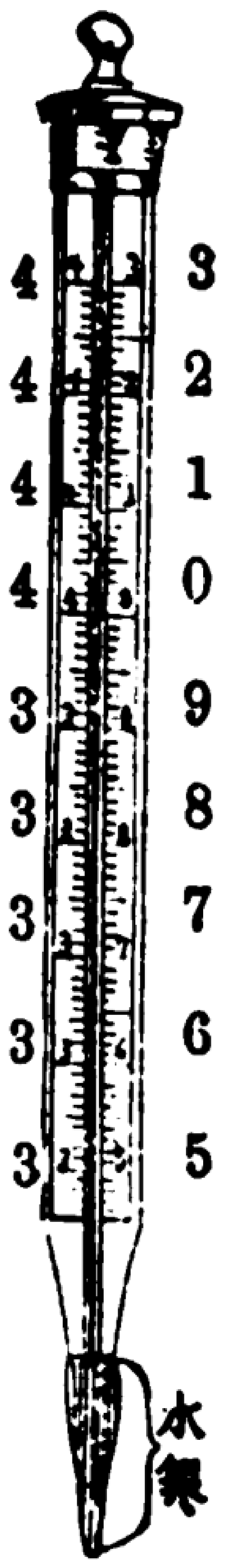
此度は躰温を計る事をお話し致します

躰温を計る事

躰温の高い低いを視ますのは大層大切な事で御座いまして是に由つて病氣の診斷もつき又病氣が宜い方に進んで來たか又は重い方に向つて來たかといふ事が分るのであります、其でありますから何病に限らず凡て日々躰温を取る事が大切で御座います、健康な人の躰温は攝氏の三十六度五分から卅七度五分迄の間で御座いまして是は日本人でも西洋人でも又亞弗利加の黒ん坊でも又は北極の近くに住んで居りますエスキモーでも皆同じ事で御座います、尤も同じ人でも朝と晩とは躰温が少し違ひます多くは朝の方が晩から見ますと五分から一度近く低う御座います又澤山食事を致しました後や身躰を使ひました後や日向に長く居りました後や又は熱いお湯に入りました後などは一時躰温が高くなるもので御座ります、是は健康の人の話で御座いますが病氣に因りますと

隨分躰温が高くなるもので御座ります、然しいくら高くなりましても攝氏の四十二度から上へ出ることは殆んどありません、四十二度からの熱が續きますれば人間はとても生きては居られません、又病氣に由りますと隨分温度が低くなるのも御座います、甚しい時には廿九度まで温度の下つた病人も有つたそうで御座いますが是は頗る稀な事で御座います、然し卅六度以下卅五度位迄下がる事は虚脱の人には隨分ある事で御座います、

さて躰温を計りますのには如何致しますかと申しますに是は寒暖計で計るので御座います、通常我國の醫者の用ゐますのは攝氏の寒暖計で「マキシムーム」寒暖計といふので御座います、此國は私の持つて居ります「マキシムーム」寒暖計で御座いますが頂度



一番低い處が卅五度以下五分の處迄目盛がして御座います、高い處は四十三度迄盛つて御座います、下の方の尖つた處は水銀の入つて居る處で御座います偖此寒暖計で熱を計りますのには寒暖計の水銀の入つて居ります部分を腋の下か或は肛門の中に差し込むので御座います、腋の下ならば十分から十五分も入れて置けば澤山で御座います、肛門の中なれば五分で宜しう御座ります、是だけの時間が經ちましたらば靜に寒暖計を取り出して水銀の柱か何此の處まで昇つて居るかを見るので御座います、頂度此國では卅九度二分の處まで登つて居ります、躰温を驗ましたらば寒暖計を鞘の中に仕舞つて置くので御座います、

寒暖計を用ゐます時に二つ三つ注意が要ります、何の寒暖計でも之を用ゐます前に其頭の處を右の手の拇指と示指で撮んで二三度ふりまして水銀の柱が

卅五度以下に下つてから用ゐるので御座います、世間ではよく躰温を計ると直に寒暖計を振る人が御座いますが是はよくないやうで御座います、次に寒暖計を腋の下に入れます時には衣物の腋の下に挾まつて居らぬやう注意しなければなりません、又腋の下がひどく汗をかいて居りましたらば手拭にて之を拭ひ去つて後寒暖計を差し込みませんと本當の温度が取れません、

寒暖計を入れましたらばしつかり腋の下を締めさして寒暖計がよく觸つて居るやうに致さなければいけません、

又肛門の中に寒暖計を入れるのには患者を仰臥或は側臥さして膝を曲めさせて後験温器の尖に少しばかりの油をぬり徐々に肛門の中に差し込むのであります、然し肛門で躰温を計る時は餘程注意を致しませんと人事不省の患者はよく騒ぐ小見などにては屢寒暖計を破壊して肛門の邊に負傷をする事があります、又肛門で熱を計ります時は腋の下の時より一度づゝ高う御座います即ち腋下にて三十八度の躰温の人は同じ時に同じ寒暖計で肛門の中で計ると三十九度の躰温がある譯で御座います、躰温を計る度數は豫め醫者に就いて其度數を計る時間とを問ひ合はせて其指圖通りに致さなければなりません、然し醫者が特別に言ひ付けた場合は致し方がありませんが其でなければ熟酔の患者殊に重症の患者の躰温を取る事は猶豫しなければなりません、病人には安慰が必要でありますから若し躰温を計る爲に病人の眠を破るやうな事が有つては甚宜しく御座いません、若し止むを得ずんば成るべく病人の感ぜぬやう靜に寒暖計を差し込むので御座います、

ついでで御座いますから寒暖計の事を一寸申述べて置きます是迄お話しました卅七度とか卅八度とか申

しますのは皆攝氏の寒暖計の度盛りで申したので御座いますが當時世間で用ゐてをりまする寒暖計は頂度三通り御座いまして攝氏の外に猶華氏の寒暖計と列氏の寒暖計と申すのが御座います、日本や獨乙では重に攝氏の寒暖計を使ひ英國や米國では專華氏の寒暖計を使ひ佛蘭西では列氏の寒暖計を使つて居ります、此三種の寒暖計の異なる點は氷點と申して水が氷になる時の温度と沸騰點と申して湯が煮え立つ時の温度との間の目盛り方が異うのであります、攝氏では氷點と沸騰點の間を百に分けて目盛り致します、其ですから氷點は零度で沸騰點は百度で御座います、華氏では氷點が卅二度で沸騰點が二百十二度で御座います、即ち氷點と沸騰點の間が百八十に分けて御座います、列氏では氷點が零度沸騰點が八十度で御座います、斯樣な具合に寒暖計の異なるに隨ひ度盛りも異りますから間違はぬやう御注意なさらなければなりません、よく夏の日などに今日は九十五度であつたの百度であつたなど申しますが之は華氏の寒暖計の九十五度なり百度なので御座います、若し攝氏の寒暖計の九十五度になりましたならば人間は生きては居られません、日本でも醫者の方の事や理化學の事には殆んど攝氏の寒暖計ばかりを用ゐますが其他の事例へば日々の天氣の事などにはまだ華氏を多く用ゐて居ります、列氏は餘り見懸けないやうで御座います、今攝氏と華氏の寒暖計の温度比較表を添へて置きますから必用の場合には對照下されませ、

攝華二氏寒暖計温度對照表

攝氏チ華氏ニ直シタルモノ		華氏チ攝氏ニ直シタルモノ			
攝氏	華氏	華氏	攝氏	華氏	攝氏
0	32.0	32	0	76	24·44
1	33.8	33	0.55	77	25.00
2	35.6	34	1.11	78	25,55
3	37.4	35	1.67	79	26,11
4	39.2	36	2.22	80	26.67
5	41.0	37	2.78	81	27.22
6	42.8	38	3.33	82	27.78
7	41.6	39	3.89	83	28.33
8	46.4	40	4.44	84	28.89
9	48.2	41	5·00	85	29.44
10	50.0	42	5 55	86	30.00
11	51.8	43	6.11	87	30.55
12	54.6	44	6.67	88	31.11
13	55.4	45	7.22	89	31.67
14	57.2	46	7.78	90	32.22
15	59.0	47	8.33	91	32.78
16	60.8	48	8.89	92	33.33
17	62.6	49	9.44	93	33.89
18	64.4	50	1.00	94	34.44
19	66.2	51	10.55	95	35.00
20	68.0	52	11.11	96	35.55
21	69.8	53	11.67	97	36.11
22	71.6	54	12.22	98	36.67
23	73.4	55	12.78	99	37.22
24	75.2	56	13,33	100	37.78
25	77.0	57	13.89	101	38.33
26	78.8	58	14.44	102	38.89
27	80.6	59	15.00	103	39.44
28	82.4	60	15.55	104	40.00
29	84.2	61	16.11	105	40.55
30	86.0	62	16.67	106	41.11
31	87.8	63	17.22	107	41.67
32	89.6	64	17.78	108	42.22
33	91.4	65	18.33	109	42.78
34	93.2	66	18.89	110	43.33
35	95 0	67	19.44		
36	96.8	68	20.00		
37	98 6	69	20.55		
38	100.4	70	21.11		
39	102.2	71	21.67		
40	104.0	72	22.22		
41	105.8	73	22.78		
92	1[illegible]8.6	74	23.33		
43	100.4	75	23.89		

それから寒暖計をお求めの時にはよく吟味してお求になる事が必要で御座います、躰温を計りますには

攝氏のマキシムン寒暖計が尤も宜しう御座います、又お求めになる時には驗定表のついたのでなければ

いけません、是は寒暖計には出來の悪いのがありまして度の異なるに隨ひ少しづゝ差違がありまして例へば正しき寒暖計の卅七度の時に卅六度九分であつたり又卅八度の時に卅八度一分であつたりするので御座います、斯の樣な寒暖計は誠に不便で御座いますから多少安價でありましても必ずお求めにならない方が宜しう御座います、驗定表に

NO………

於	加	減
42°………	0…………	0……
41°………	0…………	0……
40°………	0…………	0……
39°………	0…………	0……
38°………	0…………	0……
37°………	0…………	0……
36°………	0…………	0……

と記いてありますのは正しい寒暖計で御座います、又よく寒暖計の水銀の動きが悪いからとて湯の中に寒暖計を入れる方がありますが是は甚だよろしくありません、躰温を計る寒暖計即ち驗温器には四十三度以上の目盛りはしてありませんから熱い湯に浸けますと忽ち破裂致します、躰温の事は先づ是位に致しまして次に脉搏の事を申し上げます」

（未完）

中外彙報

姙娠心得草（寄書の次きに入るへきもの）

Dr G. K.

◉產婦保養の良否

夫れ夫婦和合して子生るゝは天施し地惠むの理にして定まりたる道なれば幾度も唯易々と生るべき道理なるに難産して苦しみ或は死するものあるは何の故ぞや姙娠十ヶ月の内保養あしければなり如何なると

を保養あしきといふ殊更に思はでも苦しからぬ事を强ちに心にかけ願ふまじき事を强て願ひ或は物妬みぶかく物疑ひたゝす夫れに產の時如何があらんとの氣遣をさへ差加へて氣のむすぼるゝと限りなく身の起居も程よからず食物の撰みもなく衣裳も厚きにのみ過ぐる等を保養あしきと云ふなり

然らば如何なるを保養よきといふ心に思ふとなく怒るとなく恐るゝとなく產の時の事も天然自然に任せてきづかはず唯心の中常に靜にして苟且にも騷かすとなく身重りて苦勞なりとも常に宜き程に立居働きいねたくともさい〳〵は寢ねず折々は晴れやかなる所に於て遠方を眺めて氣をのばし心を慰め食事も何にても差出たる物强く冷へたる物强く熱き物いずれも飮み食はず第一常の時よりは控へて過ぎざるやうに食するを保養よしと云ふなり保養よくて難產するは之れ天命と心得べし

◉貴人に難產多きこと

或人間ふ貴人に難產多く卑しきものには鮮なきはいかんと富貴の人は心のひまなるまゝに產の時兎あらんか角あらんかとの氣遣多く爲めに氣塞がり血めぐらず親族知人の訪問多く贈物にて種々の珍物あれば必ず食し過ぎて胃腸を害す又妊娠中風にやあたらんと懸念して屛風几帳深く閉ぢて外を詠めて氣を晴らすともなくひたすら欝氣をなす又病氣もなきに養生のためとて平凡の醫者が藥を勸めて却つてそこなひとなる等之れ貴人の難產にかゝる所謂なり卑しきものには此障害少しもなし朝夕の營みに心の閑暇なければ身のたゞならぬをうち忘れて產の時の氣遣もなければ氣血の滯るべきやうもなし過食して脾胃にもたるゝ事もなし屛風几帳も立てねば氣欝するとなく强く苦しむ病なければ藥ものまず之れ下﨟の難產の少なき所以なり

凡そ天地の間に雌と雄とあるもの子を生まざるはなしされば鳥獸の難產して死するとありやそれは心にいはれぬ物思をせずして身の扱ひにも私を交へず己れに相應して自然に任する故なり況んや人は萬物の靈長なれば天地の神明身にやどりて子を生まし賜ふ稀に難產すべき道理はなきを心のもちやう身の扱ひともに宜からざる故に難產はあるとなり然れば難產して死する人は我と我身を殺すなり憐れむべき事ならずや

◉懷姙中の心得

懷姙とおぼゆる日より男女の交りかたく禁ずべし胎のありさま初めの一ヶ月は一滴の露の如し二ヶ月はその露少し色つけるのみ也斯樣の時分男女交りあれば其氣の騷ぎて胎消え失せるとあり三ヶ月ののちは形漸く備る故に胎は消へ失せざれども其子生れて身かたはに病多く心も暗く愚かなるものなり愼むべし

三ヶ月の頃腹强く動くとあり藥少し用ひてよし誤りて胎を動かして落ちかゝるやうに覺えて痛み腰脇まで引つり小便しぶりて血下るときは藥を川ふべし

七八ヶ月は子其手を働らかす故に腹の中靜かならず病なくば藥を用ふべからず

懷姙の內身も心も安樂なるを必ずしも宜しとせず勿論苦勞にすべきもわろし唯平生のありさまにて常に裁縫などする人ならば其事そのまゝ勤むべし身の勉めよく心にひが思なければ天地神明の御心に叶ふ故に其產易きのみならず生るゝ子も知惠才覺必ず人に越ゆるなり

懷姙の內あしくすれば差出る病症は腹痛、血下り、胸へつき上り、身むくみ、子癇、痳病の類を起す是等はむつかしきやうなれども醫者藥のしるしを急が

ず眞實におもひ入て療法し病家にも心をせかずしておとしつけて養生すれば多分は過ちなし何ほど病み勞れても心さへ正しく慥かなれば子をうみますものなり

產の月に入ても產の時をまつ思ひなく如何にも心を靜かにして日を送るべし當り月に生るゝもあり二タ月三月もちこすもあり

◉產氣づきたる時

產氣つきて腹少しヅヽ痛む時少しも心をせかず如何にも取鎭めて虫氣か冷へか食當りの痛みかとよく吟味してたゝるべき食事もせず虫にても冷へにてもあるまじくは醫者幷に產婆を呼ひよせ容躰を云ひきかせ先つ藥を用ふべからす唯其腹の痛みて堪へ忍び時を待つが肝要なり痛みやはらかなる內に產するもあれど大方は强く痛むものなり强く痛み目くらみ人をも見わかぬ程なりとも此程の痛を堪へずして子を持つ事なるべきかと思ひ定めて心强く耐忍する內にいけみの力もいらずして安々と生るゝなり若し痛み耐忍しがたしと身をもだゆれば人々驚きて種々合はぬ藥を用ひ產婆に腹をもませなどして腹の中亂るゝ故に終に難產となるなり又產婦は左のみ苦しまざれども醫者と產婆が不功にて產を急ぎて時も至らざるにはやめの藥を用ひ强ていきみをたちさせ力を盡さするほどに子かへりもせざるに無理にいきまれ足を出だし手を出て横子逆子といふ物になりて大事に及ぶなり是等は皆こしらへて難產するといふものなり愼まざるべけんや

凡そ氣丈の貴人は腹痛强きとても侍女にだも言はず此痛にて死なば死すべしと思ひて靜まりかへりて居るほどに頓て時至りて如何にも安く產あるなり兎角產婦は痛を堪へかねる故に人を迷はし養生の道も違ひて悪性になりゆくものなり人が人の腹より出る

ほどに痛むまじきことなり此等ぞと思ひ定めて耐忍せぬは卑怯なり

痛み二三月も同しさまにて止まざる時は功者の醫者を撰みて藥を服用すべし心強く痛みを耐ゆれば難なく平産するものなり

腹をさすりたらば痛みも柔らぐべしと産婆言ふとも漫りに腹を壓迫せしむるなかれ

産所にある人産少し遲なはれば互に笑止顏して物をも高く言はぬやうなるは産婦氣遣ひして心弱り難産するものなり如何にも潤ほひ賑々しくして假りにも氣遣ひせぬ躰を見すべし

産の近づくに隨ひて力を付るとて繁く食をすゝめ産婦も食へば良きとと覺えて務めて食し反つて吐することあり注意すべし

●半産のこと

半産は産婦身の扱ひあしく食物の愼しみなく或は甚しく立腹し或は手の屆かざる所の物を取らんとして無理手をのべ或は力に叶はぬ重き物をもちあげ或は歩くとて躓き仆れなどして腹筋を引き違ゆる故に月滿たずして落るなり

胎兒の手の出でたるは多く横産にして之はいきみを早くたてゝ急ぐが故にあるとなり産婆心靜かに子を壓し上げて引き直し生ましむべし

足の先づ出るは逆産なり産婦を仰臥に寢ねしめ出たる足を矢鱈に引くなかれ

●産　後

産後には家内いかにも打靜まりて高聲に物をも言ふべからず大抵産前は家内賑はしかるべきを少し滯ふれば氣遣ひして色を失なひ靜まりかへる故に産婦もさては大事に及ぶかと力を落す産後は隨分靜まるべきを平産ときゝては人々嬉しさの餘り上下高聲になりて家内靜かならず産婦もよろこばしきまゝに心驕

立ちて血上るとあるものなり曰く靜めてよし二三日の中は夢など見て心騷げばわしき故に物語しなぐさめてさい〲は睡入らざるやうにするなり石を燒き酢にいれ又乾漆と言ふ物火にたきかゝやかしめてよし

少しにても怒らしむると大きにわろし

◉産後に禁すべき食事

食事は粥糜、淡き味噌汁、牛の乳、肉羹汁よし餅も少しはよろし産後の食に禁すべきもの

●梨子　●梅實　●桃、　●杏　●薑
●慈姑　●葛の粉　●たで　●生葱　●韮
●麵類　●蕈　●蓮根　●いたどり　●あけび
●ひしほ　●鮭　●鮎　●鮓　●なまず
●蜆　●鴨　●鳩　●雀・　●兎
●猪　●豕　●犬　●無鱗魚

◉貝原益軒の兒育草

小兒を育つるは先づ乳母かしづき從ふものを撰ぶべし心穩にして邪なく愼みて言葉少きをよしとす惡る賢こく口きゝ僞の言葉多く心邪にして僻み氣猛く姿にふるまい酩酊をこのむを惡しとす凡そ小兒は智なし心も詞もよろづの振舞も皆其かしづき隨ふものを見皆ひ聞き習ひて彼に似するものなり乳母かしづき隨ふもの惡しければ育つる子其れに似て惡しくなる故に其人を撰ぶべし貧賤なる家には人を撰ぶこと難しと云へども此の心得あるべし况んや位高く祿重き家おや

醫術衞生の法育兒の道等いまだ充分發達せざるの時に方り既に此言を發す其眼識高きものと云ふべきなり

◉箴　言

夏は發生の氣いよ〲さかんにして汗もれ人の肌膚大に開く故外邪入やすし涼風に久しくあたべるからず沐浴の後風に當るべからず夏は伏陰

とて陰氣かくれて腹中にある故食の消化することおそし多く飲食すべからず

◉臭虫による傳染の危險

昆虫類の傳染病を媒介する危險は何人も既に知れる處にして蒼蠅の如き常に食物器物上に附着傳染の媒介を逞くして人の尤も嫌ふ處なるがパウル、ミユーリング氏は歐洲一般の臭虫を試驗せしに病芽を含まざる臭虫は假令ひ螫すことあるも直接に病毒を傳播せずと（但し螫されし爲め病芽侵入の門戸は開かるべし）といへども病芽を含有する臭虫にありては實に危險なるは論を待たずして特に其臭虫の螫せしときの如き其局所に於て直に敲き殺すときには虫の表面に附着し若くは躰中に存せし病毒は刺口より人の身躰に進入するの虞れあり故に如此臭虫は決して刺せし處に於て打ち殺さゝる樣注意するを安全なりと論ぜり是れによりて考ふれば蚤の如き局所に於て捻殺し難きものは其危險最も少く蚊の如きは尤も危險なりと云ふべし又ミユーリング氏は更に水蛭に就て試驗せしに此虫は病毒傳染の害極めて少く一旦患者に用ゐたるものを再用せさるに於ては實際の危險はなき程なりといふ

◉肺病患者の統計

肺病患者は近年頻りに增加の傾きありて壯年有爲の人を多く奪ひ去るに至るは誠に哀むべきことならずや統計學者河合利安氏の說によれば每年患者數を增し三十年を二十五年に比すれば一人六分六厘即ち十萬人に十六人六分、百万人に百六十六人、千萬人に千六百六十人、四千万人に六千六百四十人丈肺病の爲めに死亡したる者の數を增加したる割合なり未だ必治の療法なしと雖へども要するに傳染は確實なることなれば壯健者は感染せざる樣充分豫防の事を心掛くべきなり今人口一万人に付肺病の爲め死亡す

る割合は左の如しといふ

廿五年	一三、二六	廿七年	一二、二三	廿九年	一四、四三
廿六年	一三、七四	廿八年	一三、七〇	三十年	一四、九二

●鼠の天性

大日本私立衛生會にては鼠の性質に就ての一般概説を應募考案中より取調べたり能く其性質を知りて捕獲の手段を行はゞ多少の便宜を得ることとならんと其概略を拔萃すれば左の如し

●鼠は疑ひ深きもので最も自衛の力に富めり●鼠の居所は兒を産む毎に變へて決して同一場所に居らず●鼠は發育速かにして生後四十日目にして親となり毎回八疋より十二疋位を產す●鼠は忍耐力を有し自己の体量より重きものも巧に運搬す●又自分が危險に陥つた時には外の鼠に知らす能あり●鼠は出入する道を定めて危險の場合にあらざれば他の道を歩まず●又多くは金物を嫌ふが如し●鼠は各々其臭を異にす●鼠は居所又は步道に放尿して驗とす●又危害に逢ふときは一種の異臭を放ちて逃げ又外の鼠にも之れを知らす●鼠の巣には必ず逃路あり●カタ〱せし踏臺には登らず●鼠は二十四時間絶食することの出來ぬものなり●鼠は光線の透ふる處を避くるの性あり

又其食物は其土地に依て嗜好を異にすれども先づ重なるものは蕎麥殼、蟹、胡桃、麻種、落花生、米粉糖餅、天麩羅、油、蛹、豆等にして猫に「マタヽビ」と云ふ如き嗜好物は見出す能はさる由併し鳥取縣にては綿の實を餌として三千五百五十二疋を捕ふるに至り最も好果を奏せしといふ

●本年上半季に於ける病死者

最近の調査に係る本年上半季に於ける東京市死亡者中其計數尤も多き病名を順次に記載すれば左の如し

一、肺癆	一、九二六	二、腦膜炎	一、二五八
三、肺炎	一、二三六	四、卒中	八三四
五、氣管支炎	六六一	六、胃カタル	六四七

七、發育不全	四九七	八、老衰	四八三
九、毛様氣管支炎	四五三	十、胃腸炎	三三四
十一、腎臓炎	三三八	十二、營養消耗	三一六
十三、脚氣	三〇四	十四、心臓并膜病	二八九
十五、癌腫瘍	二五八	十六、腹膜炎	二五一
十七、胃癌	二〇八	十八、心臓内膜炎	二〇二
十九、腸カタル	一九三	二十、流行性感冒	一六七

◉馬鈴薯の成分

調理を施さゝる馬鈴薯の化學的成分は左の如しと

水	七六、〇〇
澱粉	一九、六八
糖砂	一、二〇
蛋白質	、七〇
ゴム	、四〇
アスパラギン	、三〇
脂肪	、三〇
ソラニン	、〇五
他ノ窒素含有物	、一五
不溶解	、四〇
灰分	、八二

又馬鈴薯の主要なる成分は左の如し

	最大量	最小量	平均量
水	六八、二九	三二、二二	七五、七七
窒素含有物質	、五一	三、六〇	一、七九
脂肪質	五	八〇	一六
澱粉	一二、〇五	二六、五七	二〇、五六
木質纖維	二七	一、四〇	七五
灰分	四二	一、四六	九七

◉日本婦人の姿

外國婦人某は日本婦人の姿を評し日本の女さん誠に美しいです殊に坐つて居る姿などは一番宜しいですが起つた姿は餘り立派ではありませぬ道を歩く時にお尻を振つて口を開いて居る姿などはまことに可笑しくありますそれに話の致し方が誠に下手で筋道の立ちませぬことが多くあります又情の無いことは最も悪い缺點であると思ひます云々少しく當る處なきにあらざるなり

◉府下衛生職業者員數

去月三十一日調に依れば左の如し

醫師	二、一六四人	齒科醫	一一一人
獸醫	五六人	藥劑師	二二四人
產婆	一、一〇八人	製藥者	六五人

藥種商	八四七人	整骨術	五二人
入歯歯抜	五二人	鍼灸術	一、〇三〇人
鍼術	五七五人	灸術	三六三人
總計六	六、六三七人		

以上の數は府下人口百三十八万人に對するときは百八十五人強に對する一人にして醫師は六百三十六人弱に一人となる割合なり。

●陸軍々人死亡の比例

其筋の調査に依る最近一年間の陸軍各兵科を通ずる死亡人員千分比例を師團別にすれば（近衛六人強（第一）四人弱（第二）及び（第三）四人強（第四）五人弱（第五）六人弱（第六）六人半（第七）二人弱（第八）四人弱（第九）三人弱（第十）八人弱（十一）六人強（第十二）四人弱にして又陸軍諸學校を通じて四人強屯田各隊を通じて七人弱臺灣守備混成旅團全部に對して六人強の割合なりと云ふ

●巴里博覧會の衛生

巴里に開設されたる萬國大博覧會の佛國婦人會の出品部は重に負傷者の治療看護に關する諸器具寢臺椅子等を陳列したるものにして又寢臺其の他總て完備せる病室もあり同會の設立にかゝる一病院の模型あり四万四千人の診察二万人の外科治療を無料にて施したる由然して此の病院は六百五十人の病者を容るに足る慈惠病院にてルーベー大統領夫人其會長として盡力せりといふ

●病傷兵救護狀況

●太沽天津地方には尚大多數の傷病者滯留し居りしが追々後送の運ひに至りしといふ

●廣島豫備病院に收容中の病者と傷者とは其數殆ど相半せり

豫備病院現在患者	四百八十四名
戰地よりの傷者	内百八十名厳島轉地
病者	四百五十五名

內三十名（嚴島へ轉地）
其他百九十八名
總計一千百三十七名

●還回病傷者の經過甚だ快捷なるは之は主因と見るべきもの五あり（其一醫員の治療敏活にして遺憾なき事（其二）看護人と看護婦との精勵業に服する事（其三）陸海軍衞生部及赤十字社に於ける醫療器械の日清戰役當時に比して著しく改善されたる事（其四）病院船及御用船の患者輸送克く其目的に適ひ且つ日清戰役の經驗亦乏しからざるにあり（其五）淸國軍隊の使用したる武器の精鋭なることにして武器の利鈍と負傷の輕重とは其間緊密なる關係を保つ邦人と外國人の負傷者の經過良好なるは淸國人の携帶せる武器の精良なりし結果なりと當務者の實驗談なり

◉廣島豫備病院患者の概況

●廣島豫備病院に收容せる患者の現狀を聞くに戰地より後送し來りたる傷者の數は五百三十三人にして同病者は九百二十四人其他朝鮮又は臺灣よりの歸還兵等百九十九人合計千六百五十六人に達し猶先月二十六日嚴島に轉地療養せるもの者百八十人病者三十人あれば總計千八百六十六人となるべきも又二十七日は病院收容患者中百五十人許を轉地療養せしめたる筈なれば目下該人員丈は減少せる都合なり而して前記傷者病者中外國人は佛國百〇一人墺國二人にして佛國傷病兵中四十一は漸次大に快癒に向ひ九月中には本國へ送還すべき筈なりと玆に再錄す

◉看護婦增派の準備

先頃弘濟丸に依て後送し來りたる患者中其大部分は赤痢患者にして其看護に多くの手數を要するとなるが猶今後に於ても此等病者の增加するとなれば從て看護婦の不足を生ずるに至べきを以て赤十字社にては未だ其筋よりの命令なきも既に右の場合に處する用意整理しつゝありといふ

●篤志看護婦人會　去一日午前八時より本社に於て篤志看護婦人會例會を開き會者二十名足立講師の講話繃帶術練習等あり同十時散會せりと

●廣島の篤志婦人會　廣島なる同會は本年に至り日本赤十字社婦人會支會となり會長には山口第五師團長夫人之に當り博愛丸の宇品に着せし時の如きは一同出迎へ且病院に慰問し物を送りて病床の欝をなぐさめ繃帶を巻き袋を作るなど勤勉一方ならずといふ

●鼠とりの器械　ペスト豫防の一案として大日本私立衛生會か全國の諸新聞紙上に廣告し賞を懸け募集したる結果は餘り新案のものなく中に就き稍々優れるものは芝愛宕下四の一早川龜次郎の考案屏風形捕鼠器一個二十二錢のもの三等賞として五十圓を受け本郷森川町尾崎國五郎提出の回轉捕鼠器(一圓)及小石川指ヶ谷町池次郎提出の自働捕鼠器(一圓十五錢)の二者は等外賞として各金十圓を贈與せりと右審査は大澤、北里、三宅の三博士擔任せられたるものなり

●鼠の臭管　極めて鋭きものにしてよく牛酪の眞僞を區別すといふ鼠の嗜みて食ふものは眞物にして食はさるものは僞物なりとシレーと云へる人は實驗として報告せりといふ

●京都及堺市の上下水道　京都市の下水道は四十餘萬圓の豫算により設備することゝなり其落成後上水道に着手すべしと堺市に於ても又上下水道敷設の爲め其水準等調査せりといふ

●外國婦人と日本婦人　今回の北淸事件の記事中新聞紙は云ふ各國公使の籠城中負傷者及死者等の多くを出せしに外國婦人の勇壯義侠なるよく危險を犯して傷病者の看護に從事し其健氣なることは實に感じ入る外はなかりきといふ之に反して本邦婦人の怯懦なる大砲の音に魂を奪はれ屋隅に蟠居して毫も外出

することなく某軍醫の夫人を除くの外は看護などは思ひもよらぬことにて靜穩のときは假令へ散歩の爲め外出するも病院を見舞ふの勇なきは外國に對しても實に恥づべきことなりとあり多分は新聞屋のおまけもあるべけれども若し眞ならしめば本邦婦人の怯惰は何を咎むへきや蓋し婦人教育衛生思想發達の如何は其影響蓋し少からさるべし

●普魯西の病後養生院計畫　普魯西國文部大臣は同國高等醫務會議に於て目下同國民間には回復期患者攝生所を設立の意思あるもの多ければ如何なる方法により之を奬勵すへきやとのことを審議且將來に於ては大に公費及義捐資金を以て其設立を奬勵保護すべしとなり

審議の要領●回復期日を短縮せしめ又一方には公私立病院を無用に壙塞するの弊を除く●入院者は醫師の治療の最早必要ならさるものに限る●同院は嚴に男女の別を立て總て質素簡單を旨とし市街との交通便利なる田舍の地方に立つることとし●入院者は可成戶外に在らしめ場合に依り輕易の作業を採らしむる趣向なりといふ

●小學校令と體操　去月發布せられたる同令は體育の重ずべきを指定して從來隨意科なりしを必須科となし體操場は屋內屋外に分ち屋外は方形若しくは是れに類する形狀にして其面積をも規定せられ體育に重きを置けるは誠に喜はしきの至りなれ

尋常小學百人以上は一人に付一坪以上の割高等小學にありては同一名に付一坪半以上の割合とす

●飮食物用器具取締　同規則は來二十四五日頃には公布の運びとなるべし新調査の結果我國に於て製する罐詰は醬油及酢の作用により外皮の亞鉛分を溶解し人體に危害を與ふるの虞れあるもの少からざれば此際ブリキ及封罐用亞鉛成分等の事を取締る筈なりといふ

●中毒者三四百名　去る十五夜月見の夜大阪南地の菓子屋新盛堂方にては月見を當て込みに澤山の團子を製し賣れ行きもよかりしが之を食ひし三四百名は

何れも中毒し一時は非常の混雜なりしと中毒の原因は暑中のことゝて腐敗を恐れ防腐薬を加へしに其量多かりし爲なりと恐るべし

●女髮結の取締

社會衞生に對する取締やゝ嚴となり男子の理髮店に向つては曩に消毒法其の他の取締方布達され今や切りに勵行されつゝあるが是れと同様の害毒を流すの憂ある女髮結に對しては未だ何等取締の道も立ち居らざるより今回警視廳にては先づ女髮結營業者に屆け出でをなさしめ其の上にて取締方を勵行するの方針を取る事としたりといふ

●黑死病又大阪に發す　既に病根を絶ちたるが如き觀ありし大阪の黑死病は又々頭を擡げ來れり、同市南區舟出町の屋根葺職吉谷東吉(二十五年)は去十二日ペスト疑似症に罹り避病院に送られしが尙同市同町硝子商槇田眞吉(十七年)も其前日即ち十一日に發病翌日死亡したるが死躰檢按の結果ペスト疑似症と確定したりと

●赤痢　赤痢は秋に多く發生するものなれば淸潔法豫防法等決して怠り賜ふな但し先般ペスト流行の兆あり何地も大淸潔を行ひし爲め發生も前年に比し少しと云ふ●大阪　にては初發より本月九日まで三百九十一人内死亡七十五人之を昨年に比するに市内にて昨年は四百九十九人なりしに本年は百五十五人に過ぎざりしと●東京府下もポツ〳〵患者を出し差したることもなきが神奈川新潟縣下等にては尙流行の模様ありといふ



●肉類　凡そ吾人の食物としては肉類が最も大切な

るに相違なしと云へども病牛特に結核病に罹りしものゝ如きは勿論食物とすること能はず之れは屠るとき獸醫が一度診斷して健全不健全を見別くるが故に差支なきも

●肉中の寄生蟲　時には肉中條蟲或は蛔蟲の卵等のあることあれば生肉は危險を免れず

●豚肉中の「トリヒチ子」　豚の肉の中には「トリヒチ子」と云ふ恐るべき寄生蟲を存することあり此虫は腸に於て繁殖し身躰中に「トリヒチ子」が入込み疼痛を起す此虫一度寄生すれば又救ふべからざるに至る然れども之れは西洋の豚に多く日本の豚には極めて少し豚肉は隨分滋養のあるものなれば念の爲めよく煮て食するに於ては尤も安全なるものなれば奬勵して食品に上せたきものなり

●魚肉と獸肉　何れも滋養あれば孰れが劣ると云ふことは言へぬ日本の如き魚の澤山ある處では宜しく魚肉も奬用すべし貝類とても又有益なるもの多し

●植物性食物　日本にて製する處の豆腐味噌の如きものはなか〳〵滋養の多いもので肉と同じやうな價いを有し居り其價は非常に安いもの故食物經濟上より云ふも大切な事なり故に日本の所謂豆腐の御汁は西洋料理のソップに比適せらるゝものなり

●鑵詰　鑵詰は近來非常に行はれ遠方の旅行などするときには誠に重寶なものなるが日本にては未だ此等の幼稚なる爲め時によると鑵中の錫鉛等の金屬溶けて肉野菜の中に混ずることあり爲めに中毒を起すことあり甚だしきは石油の空鑵を用ひるなどの弊あり故に鑵詰は十分注意せられて鹽氣なき湯煮と云へるものを用ゐるが尤も安全なり

●腸窒扶斯の原因　これは窒扶斯杆菌と云へる有機物にして人の腸中に存し激しき毒ある排泄物を出し種々の症狀を呈す●傳染　土地よりし或は飲料水

よりす然れとも一回此病に罹かるや再び感ずること稀れなり年齢　十五歳乃至二十五六歳の壮年に及し●流行期　夏秋に多く不攝生の精神感動は之を牽き起す　症狀　初め全身倦怠して食慾なく輕き頭痛を覺へ一回又は數回の惡寒を發し次に發熱し蓐に就く●第一周には諸症おい／＼進み劇しき頭痛渴きつよく漸次に熱度を增し舌は乾き苔を被むり脈搏つよく衂血を出し便の通利なく脾臟腫大となる●第二周熱度は留り、全身症ます／＼進み精神ボンヤリとして或は譫語を云ひ氣管支炎を發し腹はゴロ／＼鳴りて膨滿豌豆大の黃色の下痢を起し腹部に數多の細き藍紅色の薔薇疹を現はす●第三周　經過宜しければ此週の終りに解熱し恢復期に移る●不幸なる場合には氣管支カタル、肺炎、耳下腺炎、心臟內膜炎、床ソレを併發することあり●經過　輕症なれば大約二十日乃至二十八日重症なれば五六週を經過し其恢復

は緩慢なり●營養法　尤も此病に肝要なることにして之を誤り若くは忽にすれば輕症を重症となし若くは一命を失ふの不幸に陷ることあれば之を看護する人は嚴正なる注意を以て決して猥りに食物を患者に與ふべからず●患者に與ふる飮料　清潔なる氷片或は白糖又は赤葡萄酒（水百に赤ブドウ酒三乃至五分の割合）を混じたる冷水、若くは（ヲモ湯）下痢を起さゝる場合には僅かに蜜柑の如き菓物の汁を與ふるも可なり●發病の初めに於ては滋養分ある牛乳等を良しとす●五日目頃より消化力著しく衰弱したるときは粥汁四分と牛乳一分を混和し與ふべし●第八日目より犢のソップ或は之に肉ペプトンを加へて一日三回小なる茶呑茶碗に一杯宛を飮ましむ●第二週の初めより冷水をやめ赤葡萄酒一日三四回一回に八十乃至百グラム或はブランデー一日三四回一回に二十グラムを以てし犢のソップをやめ牛肉ソップ

に代へ漸次熱去るに從ひ卵黄、粥汁、乳牛を與ふ●それより熱度平常に復し食慾進むに至るとも決して固まりたる食物を與ふるなかれ若し早く固形の食物を與ふるときは屢々熱氣を再發し下痢を起し時に腸出血するの例多し●腸出血　此場合には唯氷片或は氷水、或は粥汁を少量に與ふべし其他の注意　病者は隔離し絶へず病室に新鮮の空氣を通せしめ臥床は厚く軟く寢衣を清潔にし速に褥を離るゝを戒め精神を安靜にし全く健康に近くを待ち健康地に轉養せしむべし

大日本婦人衛生會記事

例會豫告

日々に秋冷を覺ゆるの好季節となりしを以て來十月六日第一土曜日神田御茶の水橋外女子高等師範學校内に於て本會の例會を開き皮膚病の大家なる醫學博士土肥慶藏君及其他二三大家の講演あり會員諸氏久々にて萬障御差繰御參會あらんことを

●本會贊成員（附山形支會幹事新任）

●大阪藥業界に聞へある安東忠次郎君には本會の爲め同地方會員誘導のことを擔任せられ又本會の贊成員たることを承認せられたり

●在臺灣松尾宗幽氏は今回本會の贊成員となり同地會員誘導のことを承諾せられたり

●其他贊成員の盡力　松住臨太郎君は臺灣に甲府市には武藤秀直、武田清四郎の兩君山梨縣の郡部には窪田子貞君何れも本會々員誘導の爲め盡瘁せらる感謝に堪へざるなり

●山形支會幹事の新任　同支會にては千葉幹事の補缺として川上きん子以來幹事たることを承諾せられたり

●會員種類變更（八月分）

特別　會員　出通常會員　坂谷こと子

本會入會者

○新潟支會理事　中野ゑつ子紹介（新潟支會へ申込）

●新潟上旭町　特別會員　丹羽きさ子
●仝所　特別會員　奧野すえ子
●東仲通り　通常會員　梅木しづ子
●仝學校町　通常會員　横山はる子
●仝東仲通帝國婦人協會支部内　通常會員　野中やち子

●臺灣賛成員松住氏通信

○臺灣　杉山幹子紹介

●臺灣臺北石防街四番戸　通常會員　植田たね子

○臺灣　田村ませ子紹介

●臺北東門逸街丙一號官舍室六　通常會員　山田よね子
●仝土地調査局官舍は號一號　通常會員　山田志げき子
●仝三號官舍七室　通常會員　小松はつ子
●臺北　通常會員　岩崎くに子
●仝東門逸街丙號第四號八室　通常會員　足遠くに子
●仝丙第二號四室　通常會員　保木春子
●仝乙第三號五室　通常會員　岩瀬すみ子

○甲府賛成員　武藏秀直君紹介

●甲府市稻門町廿六番地　通常會員　米山小せん子

○甲府　佐々木ともゑ子紹介

●甲府市錦町二十二番地　通常會員　三谷きさ子

○山形　加藤隆子紹介

●山形市六日町字寒河江町　特別會員　内村きん子

○山形　幹事國井よしを子紹介

●山形市新築　通常會員　奈良村きく子
●仝新築三島通　通常會員　佐藤きみの子

○筑前　松田末子紹介

●三河國岡崎町大字稲田秋須紘方　通常會員　松田順子

○横濱十全病院　磯部くに子紹介

●横濱十全病院内　通常會員　山部てつ子
●仝所　通常會員　細野とよ子

○北海道賛成員　松尾房吉君紹介

●北海道室蘭港札幌通二番地　通常會員　蛯子那珂子
●仝本町官舍　通常會員　白川よう子

○深川　井澤くろ子紹介

●深川區富岡門前山本町高等看護婦會　通常會員　堀越みつ子

○京橋　山田登貝子紹介

●日本橋區蛎殻町一丁目四番地　通常會員　山崎花子

○芝　佐藤歌子紹介

●京橋區本港町十七番地　通常會員　秋田治子

○牛込特別會員　松井紀伊子紹介

●牛込區築土前町十八番地　通常會員　古澤信子
●本郷駒込四片町十番地和田方　通常會員　和田英子

○本郷　小山花子紹介
●長野縣師範學校女子部　通常會員　横田ゆき子
○麹町　佃梅子紹介
●麹町區富士見町五丁目廿三番地　通常會員　高島なを子
○麹町　中尾重子紹介
●麹町區永樂町永樂病院内　通常會員　植木むら子
○事務所へ申込
●栃木縣芳賀郡茂木町二百番地　通常會員　片岡ちか子
●深川區東森下町百五番地　特別會員　谷崎直子
●牛込區若宮町百五番地　特別會員　峯尾志げ子
●佐賀縣西松浦郡有田町五百七十四番　通常會員　西岡安子
●仙臺市片平町一番地　通常會員　松田眞都子
○山梨　窪田子貞君紹介
●山梨縣西山梨郡千塚村　通常會員　須藤みさを子

◉山梨縣知事夫人入會

●山梨縣甲府市常盤町二十二番戸　特別會員　加藤山起子

轉居

會員諸氏御轉居の際は必らず乍御手數事務所宛御一報相願候

●本郷區西片町十番地ろ十號へ　佐著操子
●神奈川青木町字宮洲町三千五百八十六へ　中村久巳子
●麹町區永田町一丁目十九番地別邸へ　森寛子
●長野縣諏訪郡上諏訪町高島病院へ　碓田ぶん子
●臺灣臺北東門邊街丙一號五室へ　田村ませ子
●小石川區表町五十一番地へ　酒見ふさ子
●北海道札幌區南一條西五丁目二十番地へ　根岸八重子
●南品川一丁目十三番地房州屋方へ　津田たま子
●芝區三田四國町三十二番地へ　長野とし子
●本郷區元町二丁目五十五番地中村方へ　今泉きく子
●本所區龜澤二丁目三番地へ　磯邊つや子
●麹町區平河町四丁目十番地へ　近藤きく子
●愛媛縣伊豫今治米屋町へ　矢野徳代子
●麹町區永田町二丁目六十六番地へ　佐武照子
●伊豫國温泉郡三津濱町大字新町四十九番戸　守屋やす子

◉交換寄送雜誌（八月分）

イロハ順

●日本婦人	第十號	東京帝國婦人協會
●日本産婆學雜誌	第八號	東京日本産婆學協會
●日本赤十字雜誌	第八十八號	東京日本赤十字發行所
●二十世紀醫事	第二十號	
●統計集誌	第二百三十三號	東京統計協會
●統計學雜誌	第百七十二號	東京統計學社
●中外藥報	第卅三號第卅四號	中外藥報社
●獵友	第一卷七號	東京狩獵協會
●看護婦人	第二號	看護婦人協會
●體育	第八十二號	日本體育會
●大日本私立衛生雜誌	第二百七號	大日本私立衛生會
●圖々珍聞	第千二百七十九號	東京珍聞館
●通俗衛生	第二十五號	大坂私立衛生會
●藥學雜誌	第二百二十二號	東京日本藥學會
●藥石新報	第三百六十一號　第三百六十二號　第三百六十三號	大坂藥石新報社
●婦人新報	第四十號	東京婦人矯風會
●婦女新聞	第八號第九號第十號　第十一號第十二號	婦女新聞社
●國家醫學會雜誌	第百六十號	東京國家學會
●工業雜誌	第二百一號	東京工業雜誌社
●越佐教育雜誌	第九十二號	越佐教育雜誌社
●天然足會報	第二號十四冊	臺灣松住臨太郎氏寄送
●産科婦人科學雜誌	第二卷十二號	東京日本産科婦人學會
●教育實驗界	第六卷二號　第六卷三號	東京育成會
●彰善會雜誌	第三十號	東京彰善會本部
●淑女	第二卷八號	東京紫驚社
●女學講義	第二回三十四卷	東京大日本女學會
●廣島衛生醫事月報	第二十號	廣島衛生醫事月報社

私立大日本衛生會

●新潟支會規則

第一條　本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり

第二條　當支會の會費は左の六種とす

終身會員	一時限り出金貳拾圓	
特別會員	毎月	金參拾錢
通常會員	仝	金貳拾錢
支會員	甲毎月	金拾錢
	乙仝	金五錢

第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし

第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す

第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす

第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く

會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す

各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす

第七條　支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演説をなすべし

第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す

第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし

第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし

會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は賛成員となすべし

第十一條　一般慈善事業の賛助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす

第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし

第十三條　特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

私立大日本婦人衛生會

●山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衛生會々員山形市在住者を以て組織す

第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名商議員若干名を置く

會長副會長は公撰し幹事商議員は會長之を撰任す

役員の任期は一ヶ年とす

第三條　本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす

第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし

本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし

第五條　本會々費は會計幹事に納むべし

但し六ヶ月又は一ヶ年分

新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし

第六條　服裝は精誠質素なるを要す

上着及羽織は絹布を用ゐるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

私立大日本婦人衛生會

山形支會

事務所山形市檜物町川上方

●大日本婦人衞生會規則摘要

一本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究せしめ衞生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり
一會員たると欲する婦人は何人にても入會することを得
一入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込むべし入會者には會員證を交付す
一會員を分ちて終身特別及通常の三種とす
終身會員は一時に金拾圓以上●特別會員一ヶ月金貳拾錢以上●通常會員一ヶ月金拾錢を納むるものとす●男子贊成員亦同じ
一男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じと雖も本會に功勞あるもの又は本會に於て特別贊成員たることを望みたる者は役員協議に依り無會費とすることあるべし
一會員は本會に於て每月發行する雜誌を無料にて受ることを得
一退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より又通知すべし但既納の會費は返戻せず
一集會は例會總會及評議會員とす集會は八九月を除くの外每月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす
但每會學識經驗ある者に衞生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす
一會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を陪聽せしむるを得(勸めて衣服は質素たるべきこと)
一講義演說等は男子の傍聽を禁す但贊成員若くは會員縁故ある男子は此限にあらずと雖も贊成員の外は本會の都合に由り臨時謝絕することあるべし

●支　會

一地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得
一本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載し申出づべし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報知すべし
一本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす尙詳細は本會事務所へ承合すべし

●注　意

一會費は東京府下に限り每月會費領收人を差出すべし地方會員入會の際は前金を以て會費三ヶ月分又は六ヶ月一ヶ年分を納付せらるべし
一會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局(東京牛込郵便局)宛振出あるべし又通運便何にても差支なし
一會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵劵にて納むるものは受領證送費として別に郵劵三錢を添へらるべし
但止むを得ざる場合には郵劵を代用するも妨げなしと云へども總て一割增とす
一轉居せられたるときは其旨必らず本會事務所宛通知せらるべし
一會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざるものは役員會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

廣告料	一行	八錢
	一頁	參圓
	總て前金	

本會廣告取次　東京神田末廣町一　電話本局一四四　博報堂

本誌定價一部二十錢　每月一回發行

東京市牛込區矢來町三番地中丸、四

發行所　私立大日本婦人衞生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行者　田中德三郎

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　戸上義章

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷　株式會社秀英舍第一工場

(明治二十六年四月四日遞信省認可)(明治二十一年二月二十八日內務省認可)